昭和44年12月23日第3種郵便物認可昭和49年7月1日発行毎月1回1日発行

日本バドミントン協会

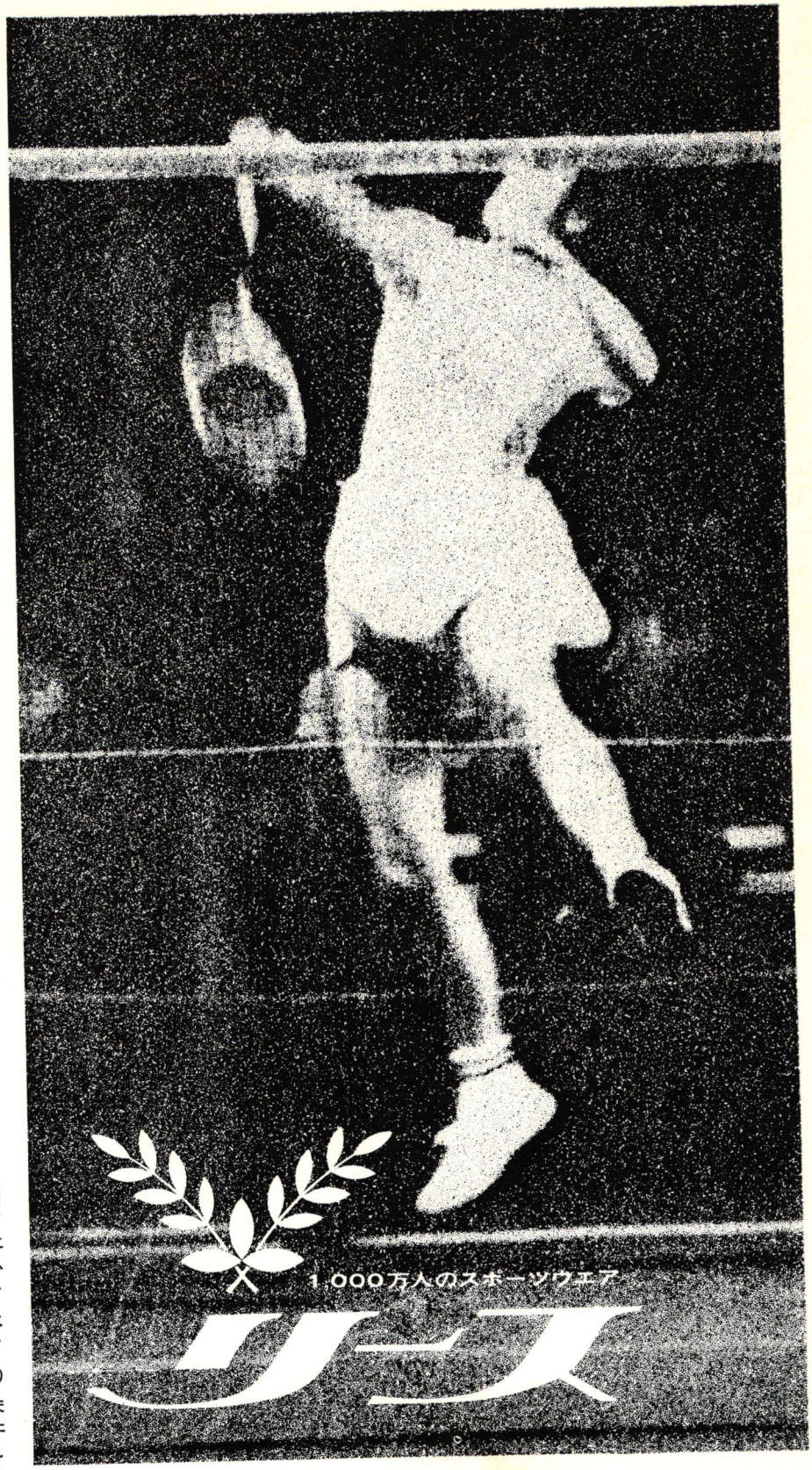
バドミントン界

THE BADMINTON WORLD

57 JULY 1974



この一瞬!!



あなたはひかる――はげしい動き、ふき出す汗、すべての条件を
プレイヤー本位に満たすカワサキの〝リース〟はあなたのウエアです。

K TOKYO
河崎ラケット工業株式会社
東京都台東区台東2-28-5 電話(831)1884・0453



バドミントン界

〈49年7月号〉

＝全英選手権大会写真大特集＝
★女子シングルス
湯木、みごとに世界の女王の座へ……2
ギルクスのドロップ・ショット……4
決勝・湯木スタートダッシュよく一ゲーム先取……5
ギルクスけん命の追い上げ……6
うれしい!!……7
明と暗……8
★男子ダブルス
池田・栂野尾組がガッツでベスト4へ……9
〝弁慶〟イギリス〝牛若丸〟日本に完敗……11
準決勝・チュンチュン・ワジュディ組に完敗……12
インドネシア同士の**決勝**……13
世界のナンバーワン・ペア……14
★男子シングルス
ハルトノ7連覇なる……16
日本勢2回戦で姿消す……17
決勝・グラナン突っ走る……18
ハルトノ危うし……19
ハルトノ、ジリジリばん回……20
驚異の大逆転……22
★女子ダブルス
相沢・竹中組夢破る……24
ベック・ギルクス組優勝の瞬間……26
★混合ダブルス
女子も男子顔負けの攻撃を展開……30
優勝はエディ・ウェトナール組……33
―連載―
体当り実戦教室（第六回）小島一平……34
私の歩んできた道（第四回）中山紀子……36
ビギナーへの手紙（第二回）羽戸民敦……38
編集室から・お知らせ……40

スタッフ／表紙撮影・山田真市／同製作・小浜正道／グラフ写真・連続写真・山田真市／協力・日本協会事務局、各加盟団体、愛読者

第64回全英選手権大会写真集

湯木、みごとに世界の女王の座に



1974年の全英選手権大会は、3月20日から24日まで、イギリスのウェンブレー・エンパイアプール・アンド・スポーツアリーナで開かれた。

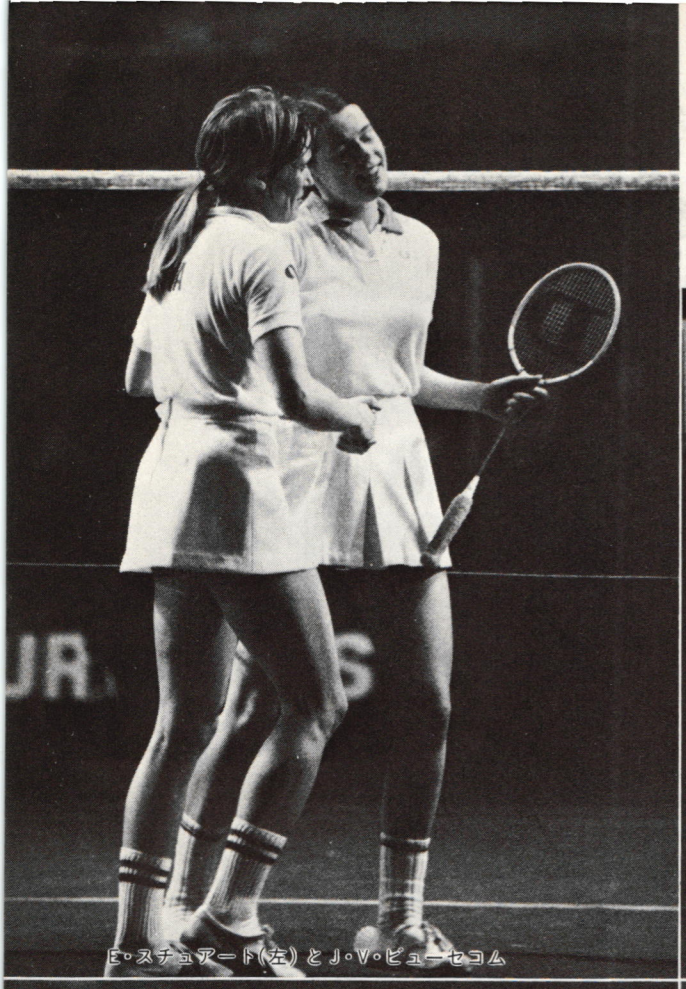
日本からは、池田信孝（電電東京）、栂野尾昌一（ヨネックススポーツ）、湯木博恵（河崎ラケット）、竹中悦子（ヨネックススポーツ）、相沢マチ子（同）、池田美加（河崎ラケット）、銭谷欽治（中央大学）の7選手が参加、熱戦がくり広げられた。

そして、女子シングルスで湯木は1969年に続いて二度目の栄冠をみごとに獲得し、さらに男子ダブルスで池田・栂野尾組がベスト4に進出するという大健闘をみせた。

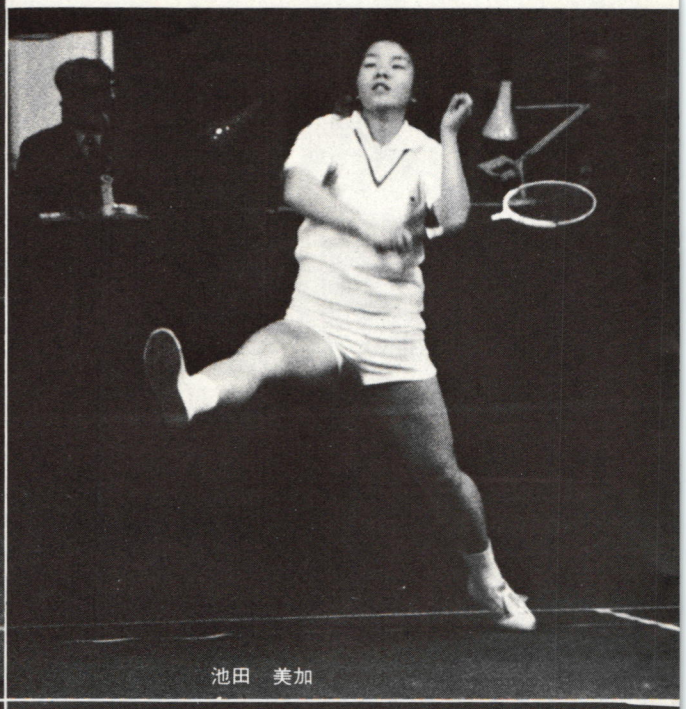
しかし、三連覇を期待された相沢・竹中組は、準々決勝で地元の強豪ペア、ボクソール・ウエトナール組（69年、70年の全英チャンピオン）にストレートで敗れ、夢を断たれた。

本号では、全英選手権を直接取材してきた山田真市氏のみごとな写真を特集しました。山田氏は全デンマーク・オープン選手権も撮影してきましたが、全英選手権のスナップとともに次号で特集します。それではまず女子シングルスからグラフをつづります。

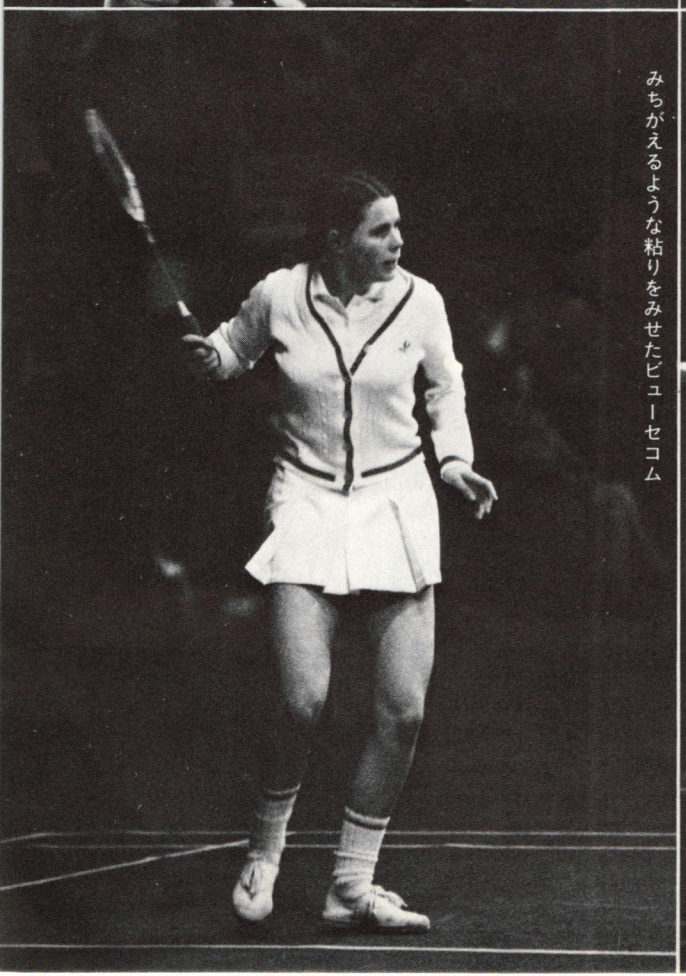
女子シングルス1回戦で池田はスウェーデンの女王エバ・ツェドベリ・スチュアートに惜敗、スチュアートも準々決勝でヨーケ・バン・ビューセコム（オランダ）にストレートで敗れ、湯木はビューセコムと準決勝で対戦した。ビューセコムは来日の時とは別人のようながんばりで食い下がり、湯木をあわやというところまで追い込んだ。



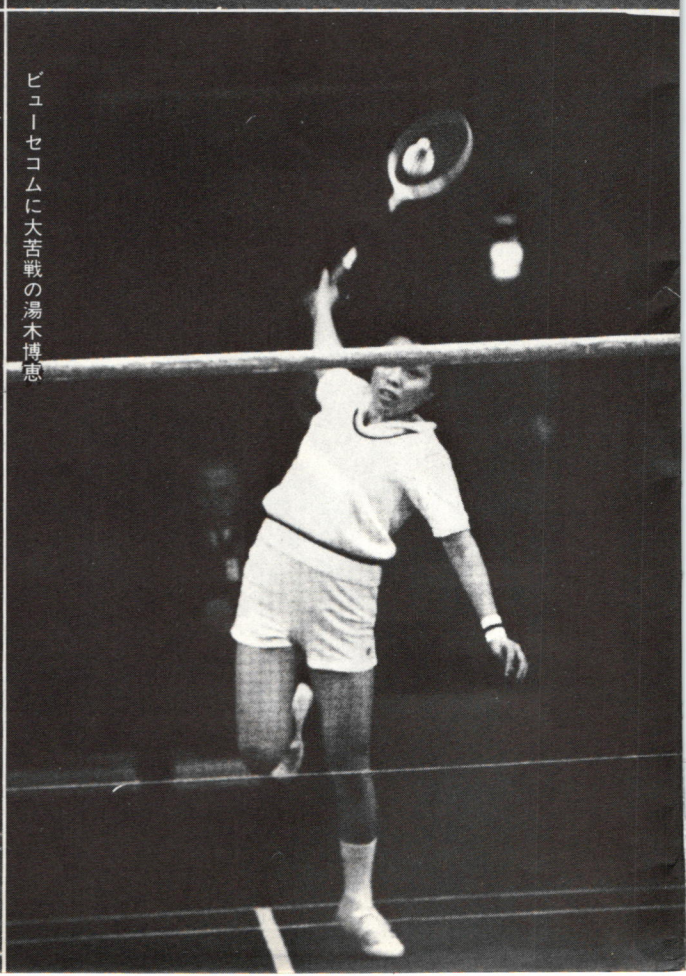
E・スチュアート（左）とJ・V・ビューセコム



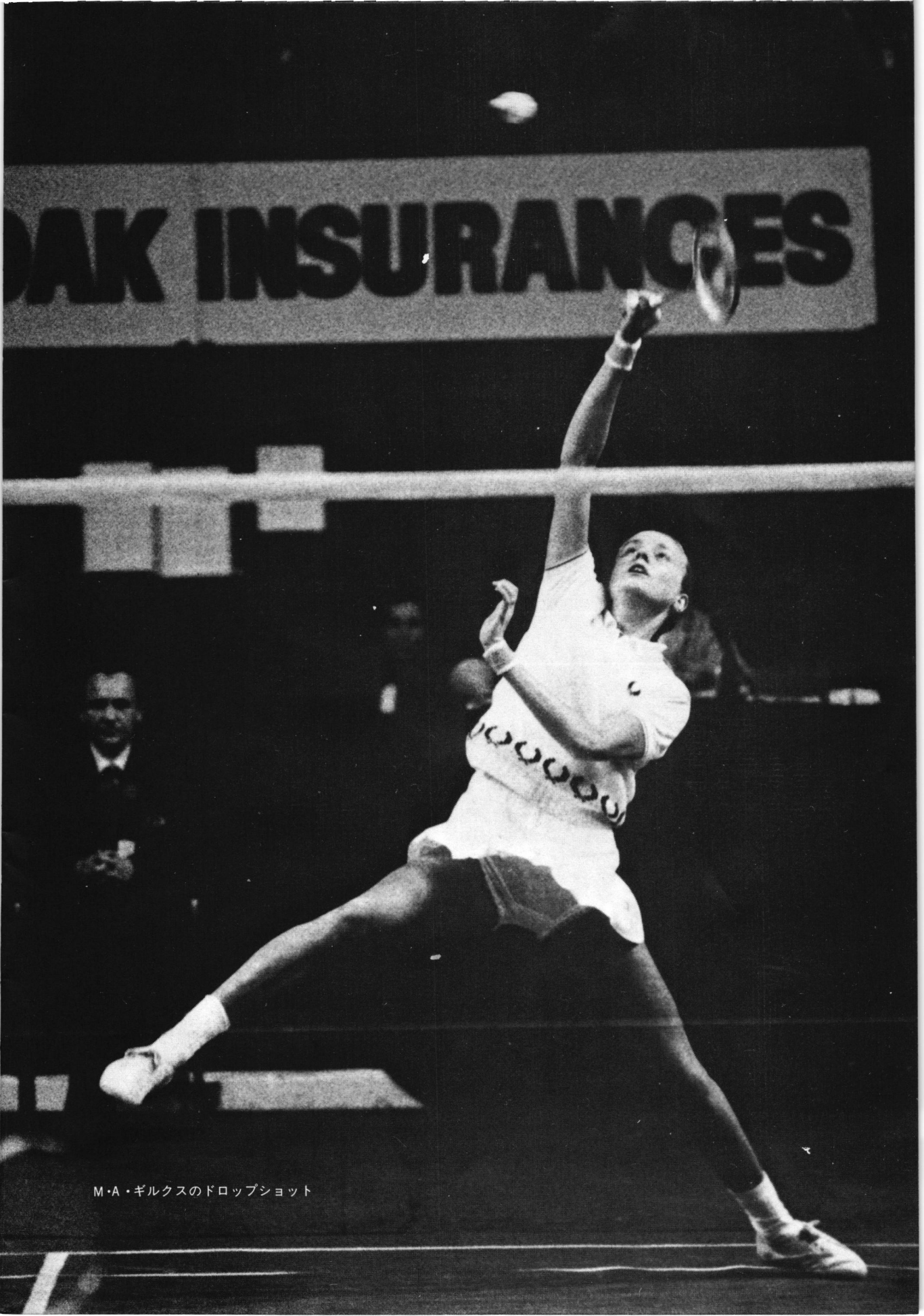
池田　美加



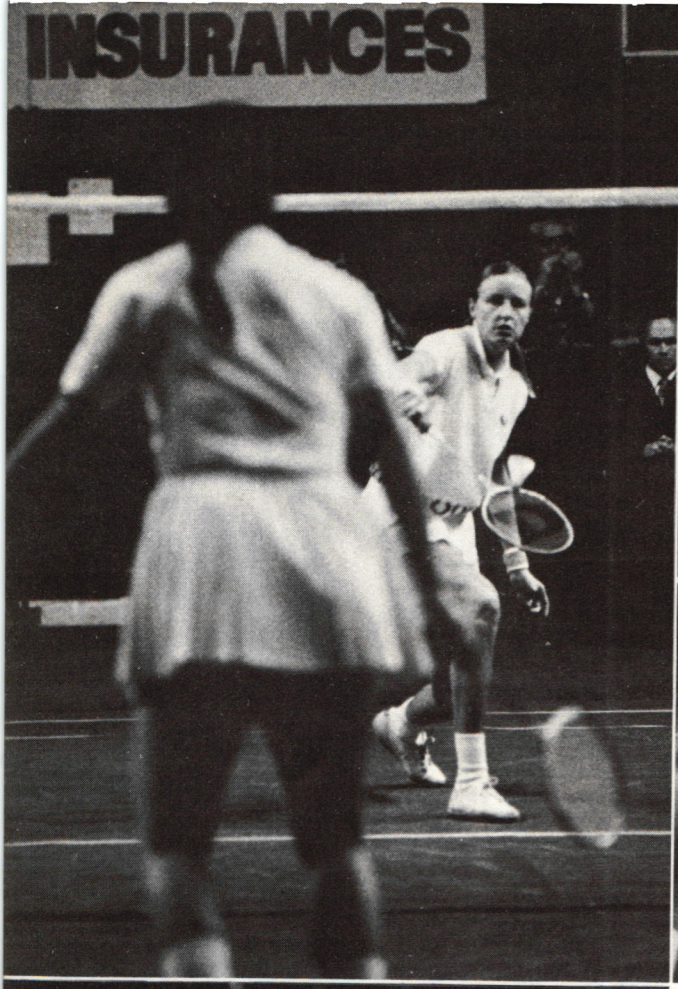
みちがえるような粘りをみせたビューセコム

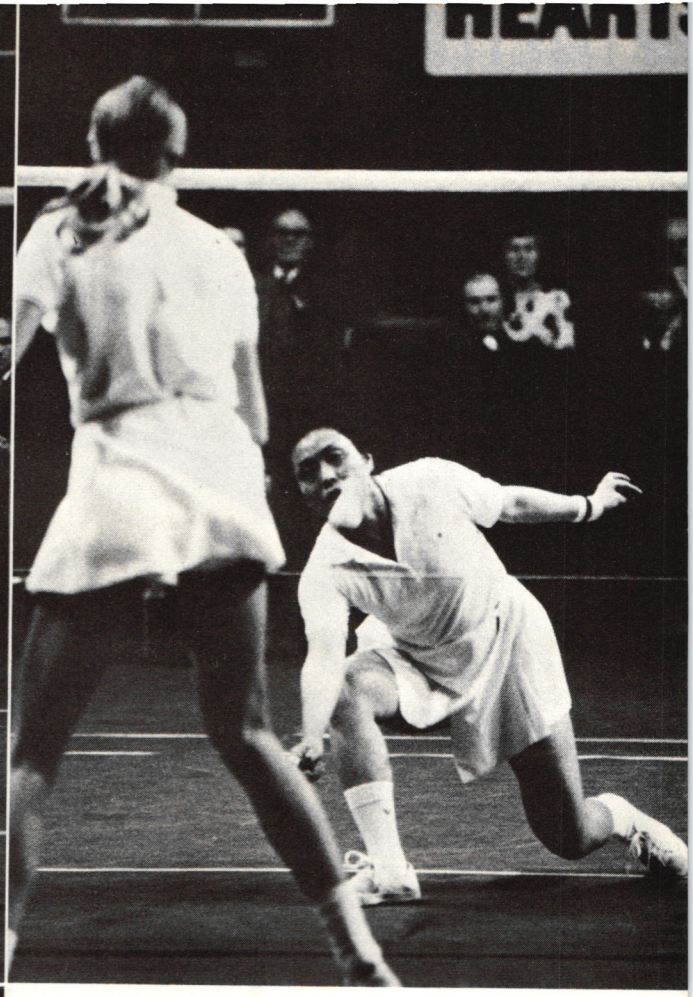


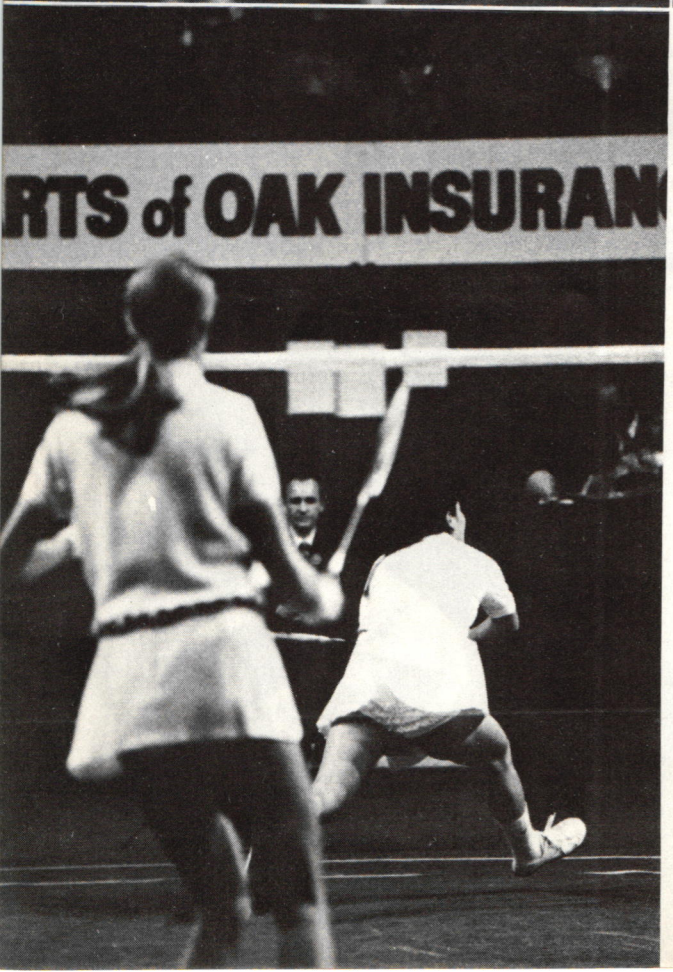
ビューセコムに大苦戦の湯木博恵



M・A・ギルクスのドロップショット







●女子シングルス決勝

湯木、スタートダッシュよく一ゲーム先取

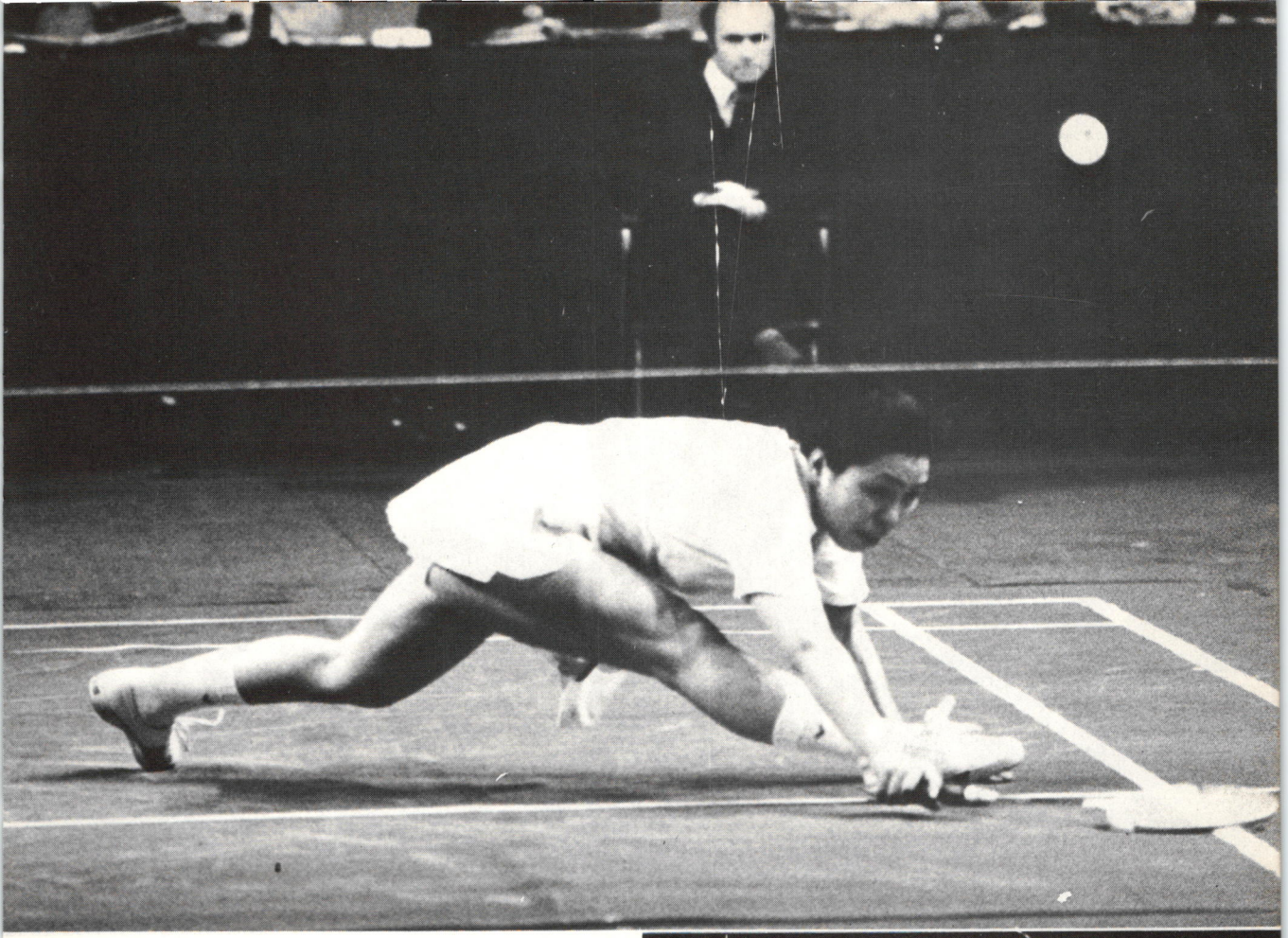
湯木は決勝で、リーン・コーペン（デンマーク）を破って進出してきたM・A・ギルクス夫人（イギリス）と対戦した。

ギルクス夫人は前年に続いて二連勝をねらって意欲的にプレーを展開したが、勝とうという意識が強かったためか、固さがみられるのに対して、湯木はスタートから快調にとばし、第1ゲームを11－6で先取した。

ギルクスの特長は長身を生かした強烈なスマッシュと角度のあるドロップ・ショット（右ページ）。

これに対し、湯木はよく走り回って拾い、丁寧に返球し着々とポイントを重ねた。

頭上を越されたシャトルをよく追いついて返すなど、湯木は攻守にファインプレーをみせ、観衆をうならせた。



●ギルクス、けん命の追い上げ

しかし、第2ゲームになるとギルクスは俄然調子をあげ、大いに湯木を苦しめた。

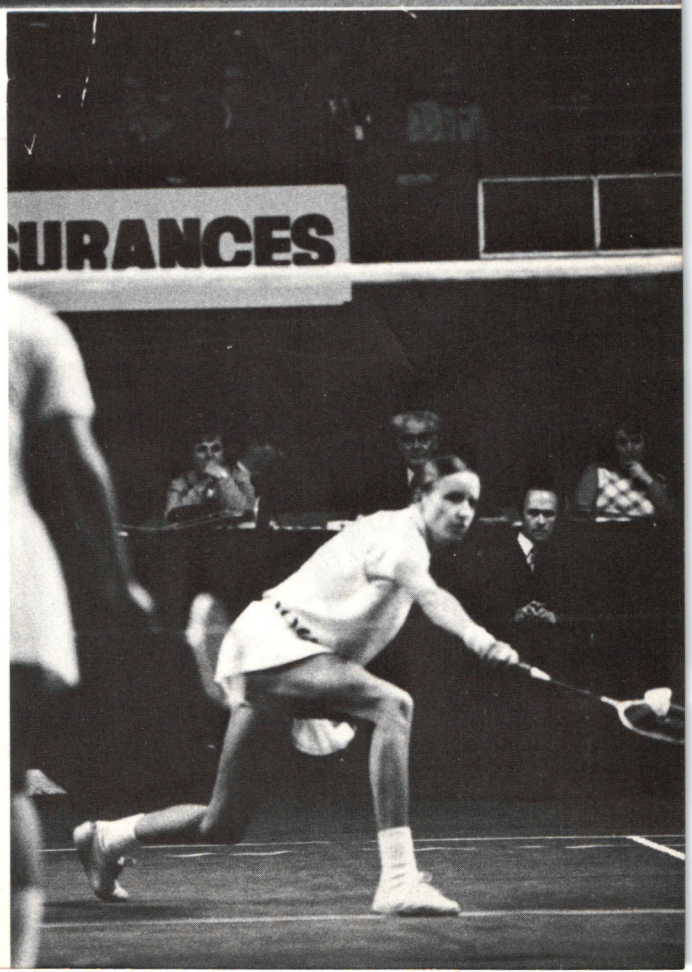
湯木もコート狭しと走ってシャトルをよく拾い（写真上）、9－8とリードを奪ったもののアンラッキーもあってギルクスにセッティングにもちこまれた。

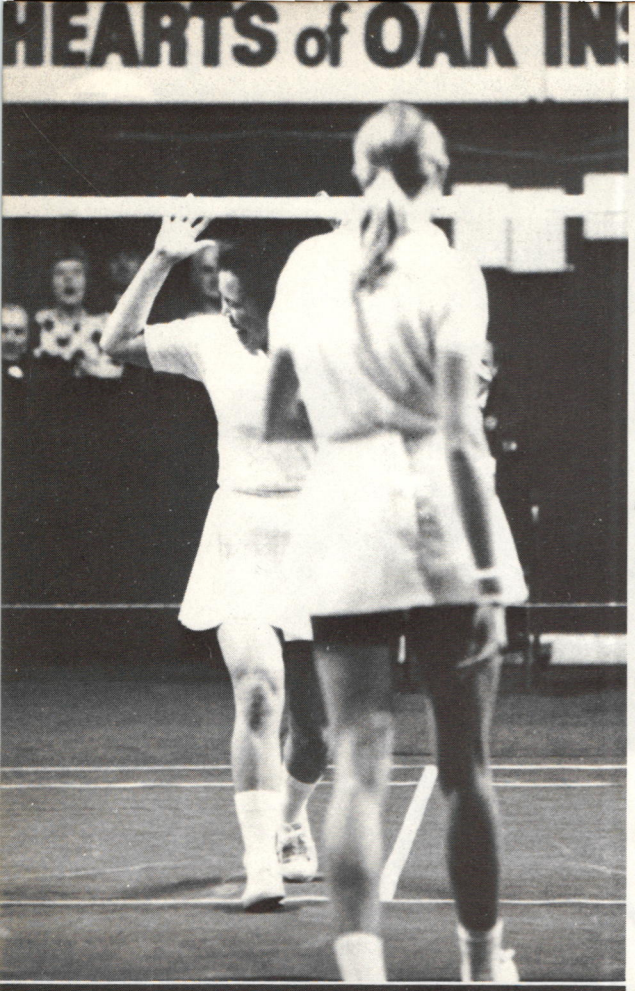
そして、セッティングにはいってもギルクスは快調で、2－0とゲームポイントをにぎり、ファイナル・ゲームにもつれこむ様相となった。

しかし、ファイナルに持ちこまれては危い（湯木選手の話）と考え、最後の一本をゆずらず、湯木はショートサービスをくり出し、ギルクスのミスを誘って2－2のタイに持ちこみ、マッチポイントをにぎった。

しかし、そこで放ったショートサービスは肩に力がはいったためポップアップ。〝やられたか！〟と思った瞬間、ギルクスのレシーブはアウト。

この瞬間、湯木の5年ぶり2度目の栄冠が決定したのである。

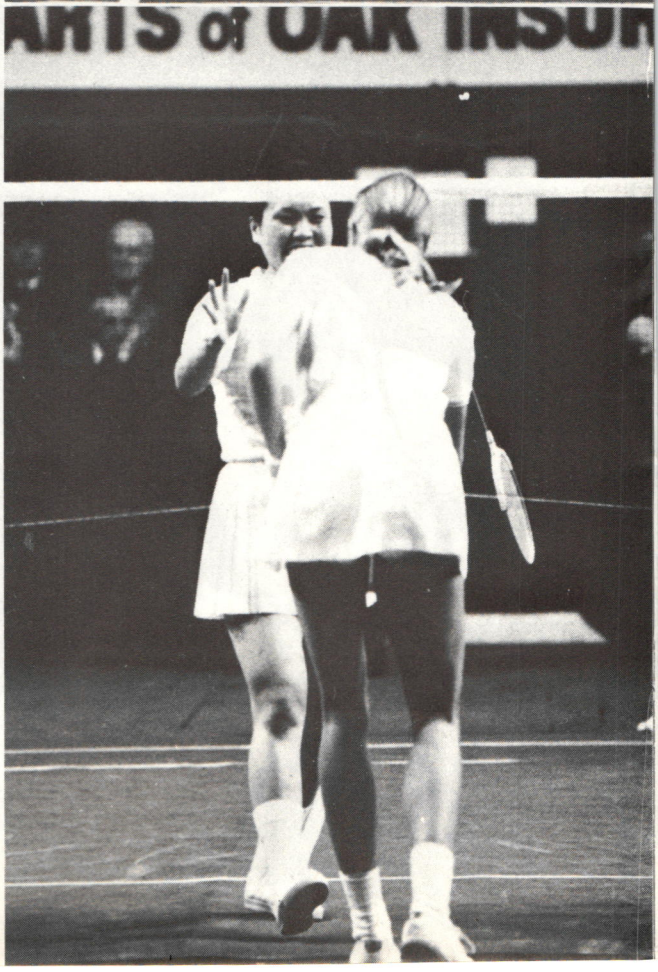


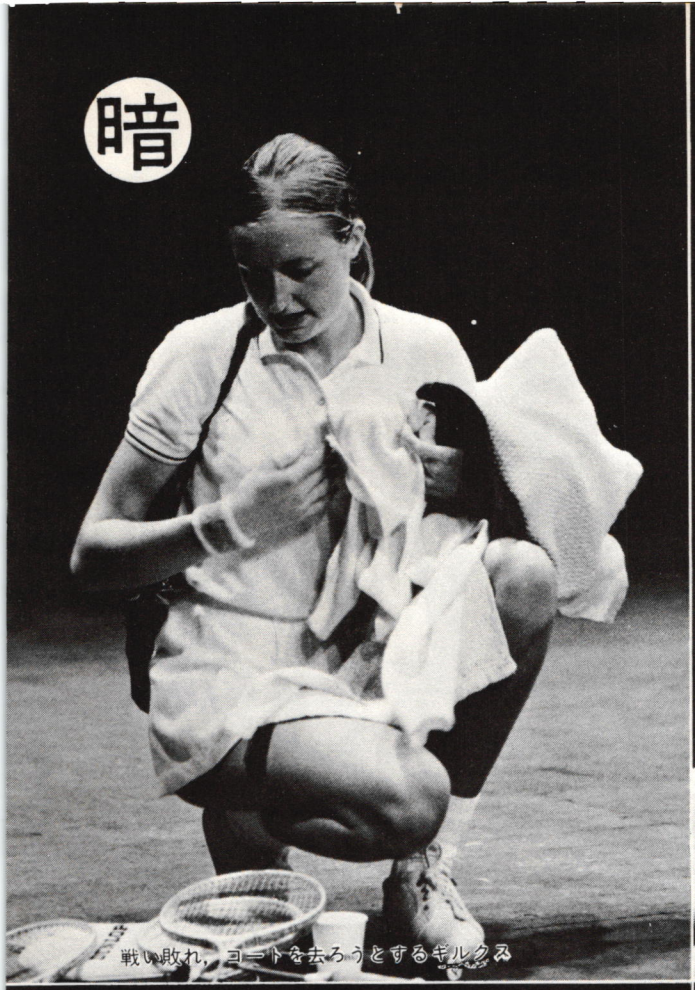




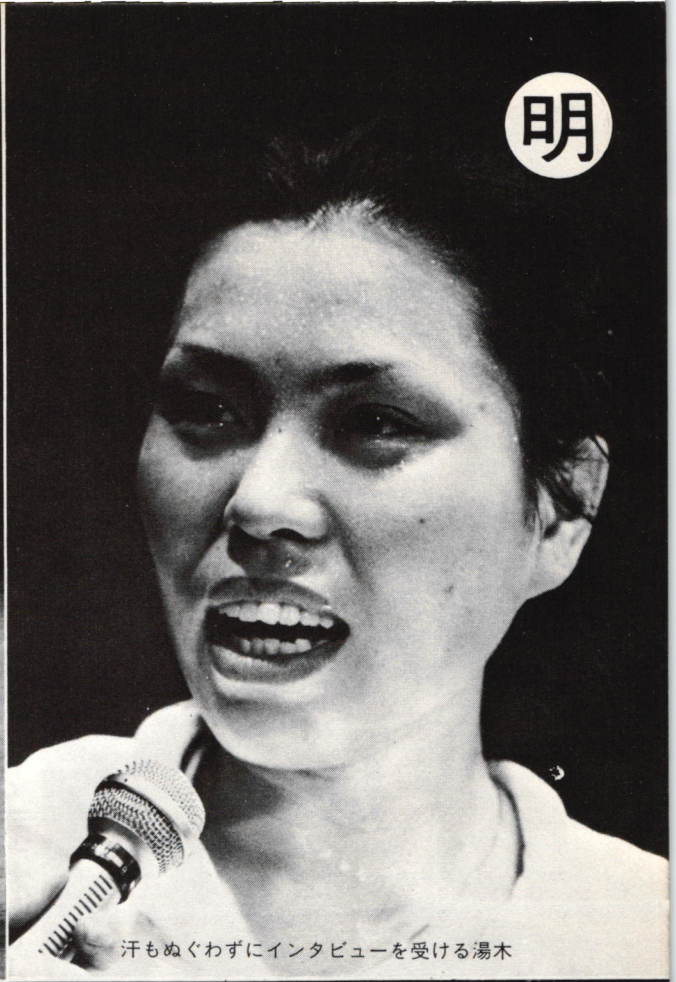
●うれしいッ!! 全身で喜びを表わす〝女王〟湯木





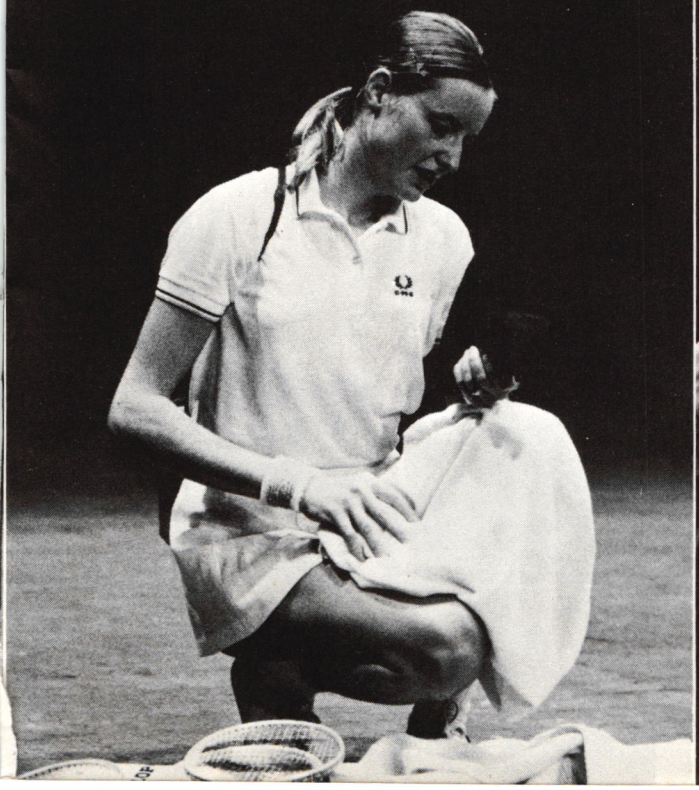


戦い敗れ，コートを去ろうとするギルクス

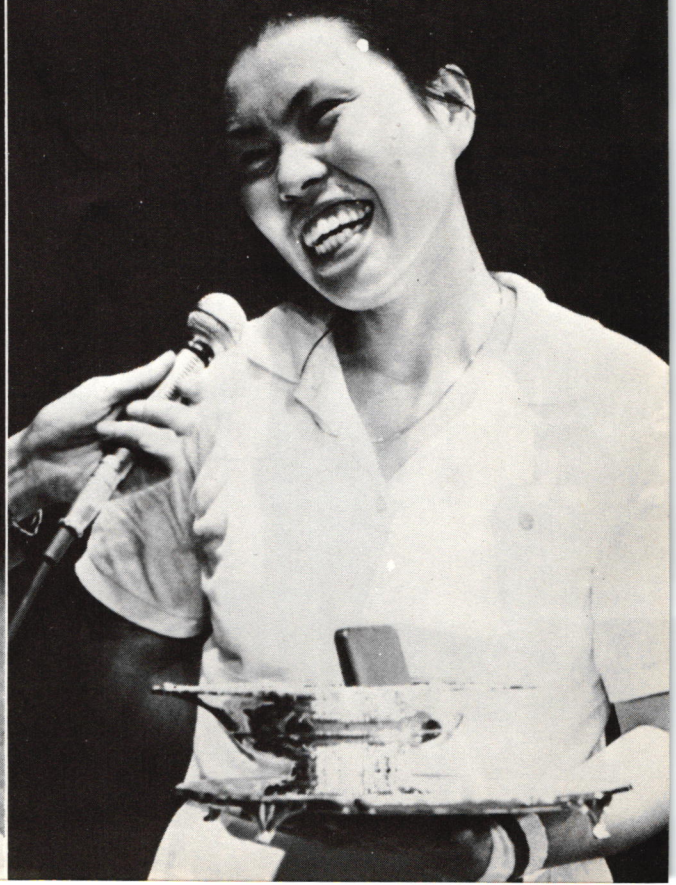


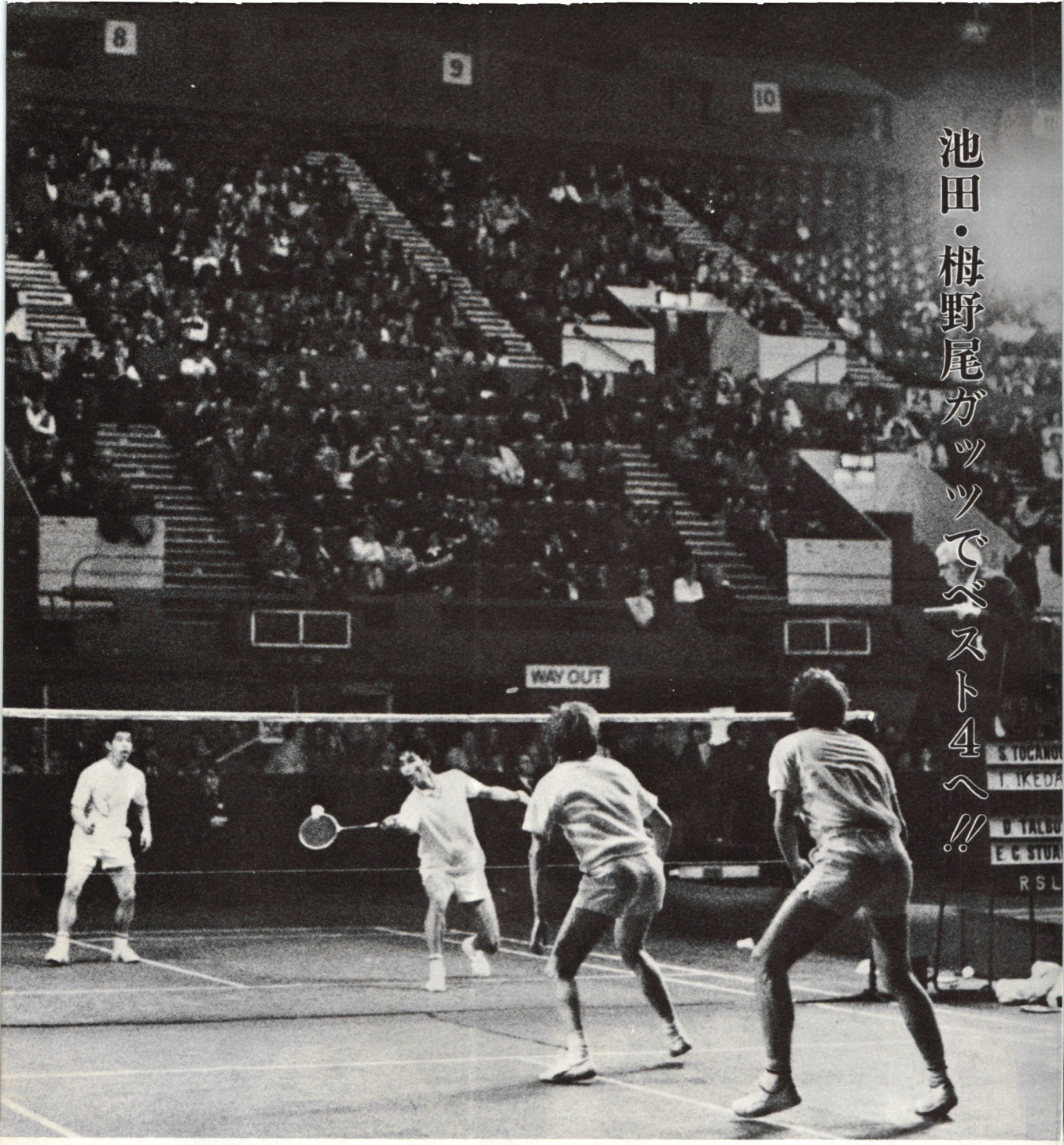
汗もぬぐわずにインタビューを受ける湯木

ギルクスの横顔に勝負のきびしさがにじんでいる



何をきかれても嬉しさいっぱい





池田・梅野尾ガッツでベスト4へ!!

池田・梅野尾ベスト4に!!

男子ダブルスは、池田信孝・梅野尾昌一組が、2回戦でローズ・ノーガード組(デンマーク)を破ったあと、3回戦でイギリスのベテランペア、E・C・スチュアート・D・タルボット組と対戦した。1ゲーム目を4―15と落とし危ういと思われたが2ゲームから復調15―11、15―6と連取し逆転勝ちした。

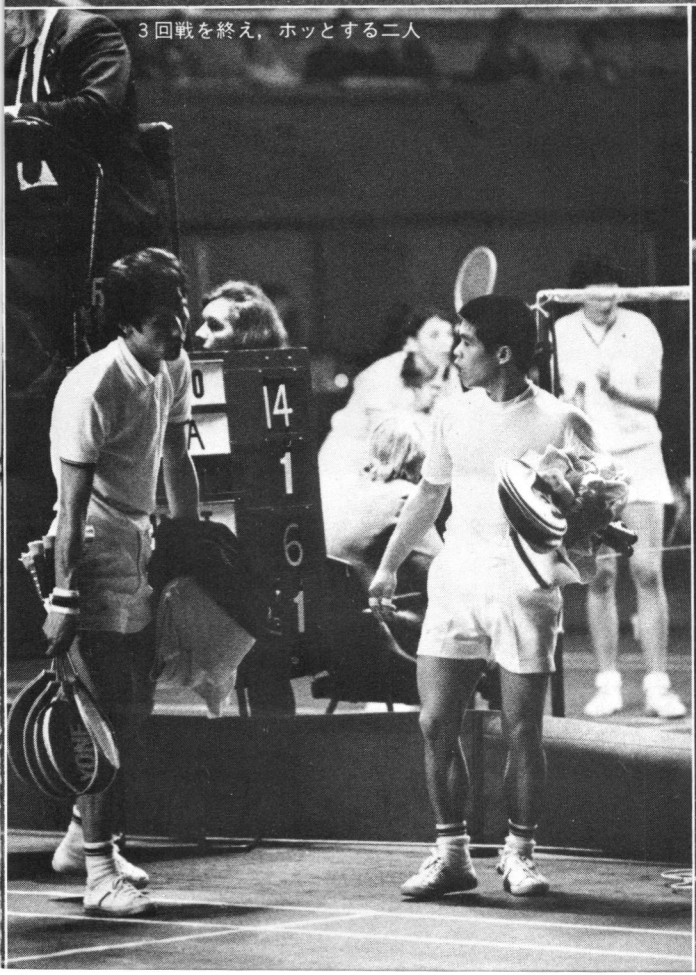
これで調子づいた池田・梅野尾は続く準々決勝で、P・バリヴァン・W・キッド組(イギリス)にもフルゲーム、セッティングという大熱戦の末、念願のベスト4入りという活躍をみせた。

そして、準決勝でインドネシアのナンバーワンペア、チュンチュン・J・ワジュディ組に挑戦したが、すばやいタッチと猛烈な攻撃にあって完敗した。チュンチュン・ワジュディのペアは決勝でも僚友チームのクリスチャン・I・スミラト組にストレートで勝ち初優勝を飾った。

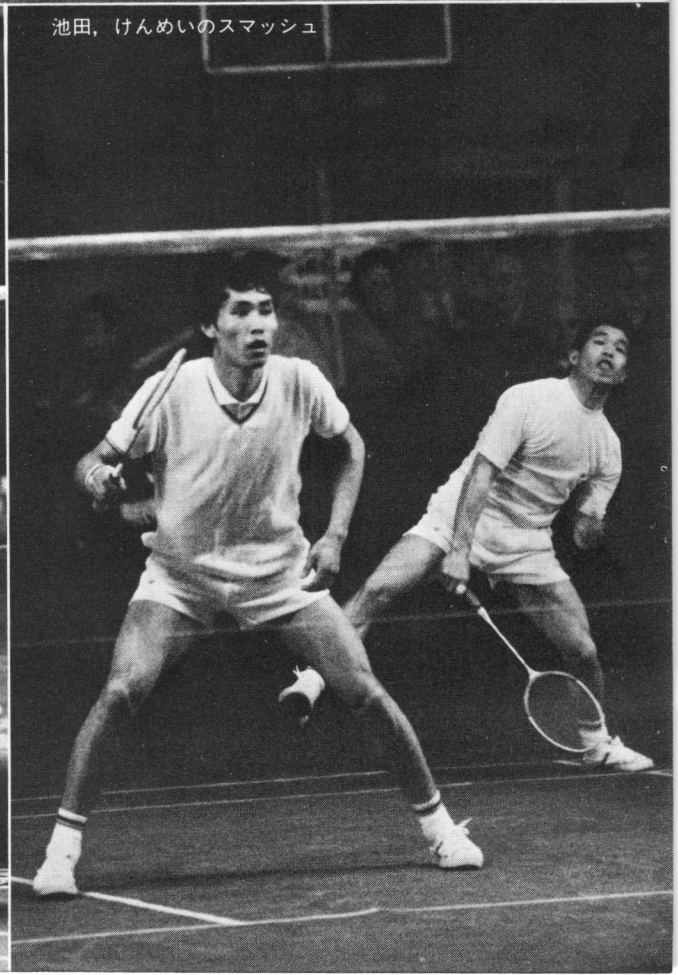
ガッツをむきだしにして拾いまくる小柄な池田と、カンの鋭いアタックをみせる梅野尾に対し、場内からも盛んな声援がとび、不振の男子チームにあって大きな光明をもたらした足跡をふりかえってみよう。



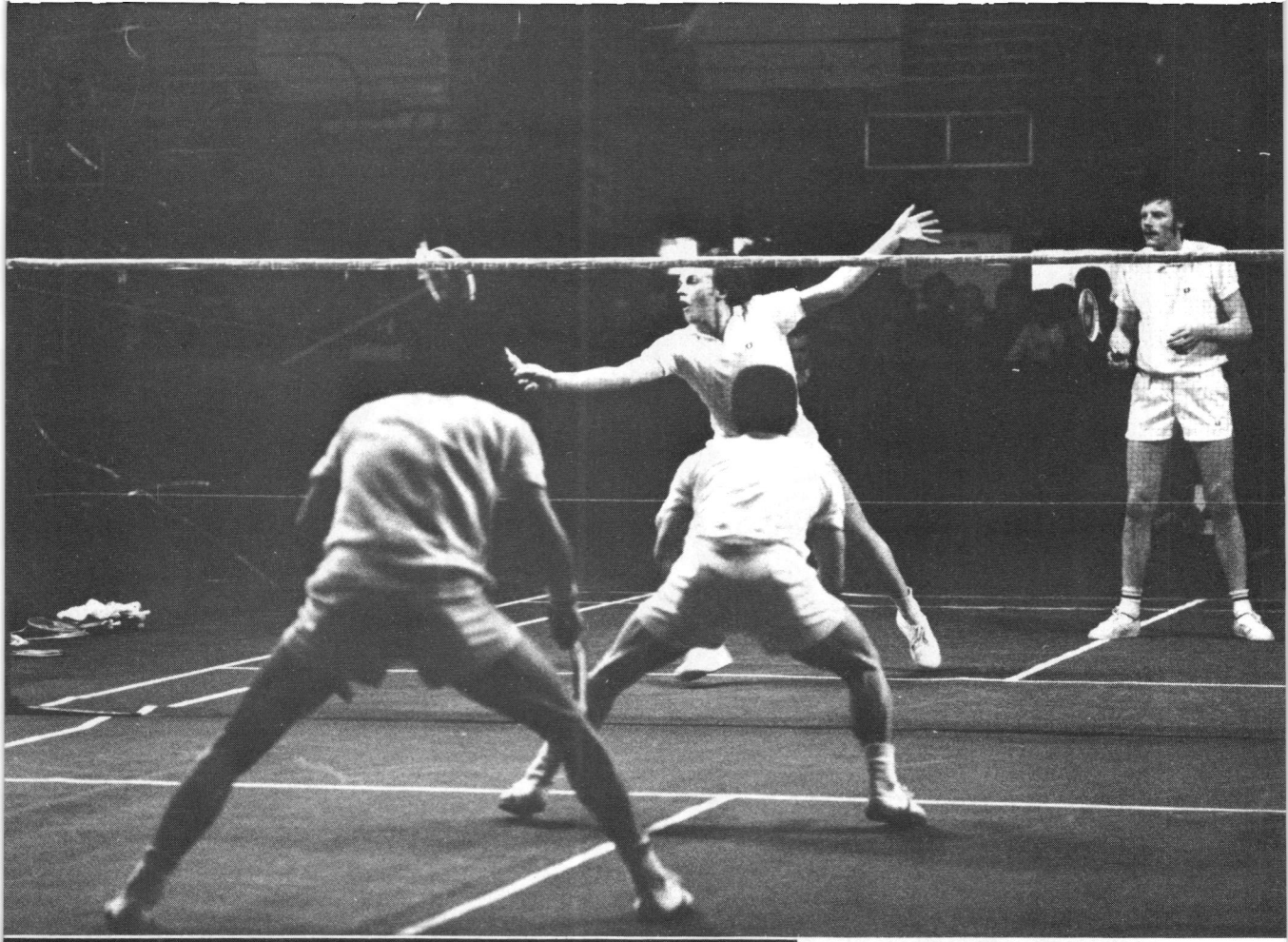
栂野尾，飛び込んでプッシュを決める

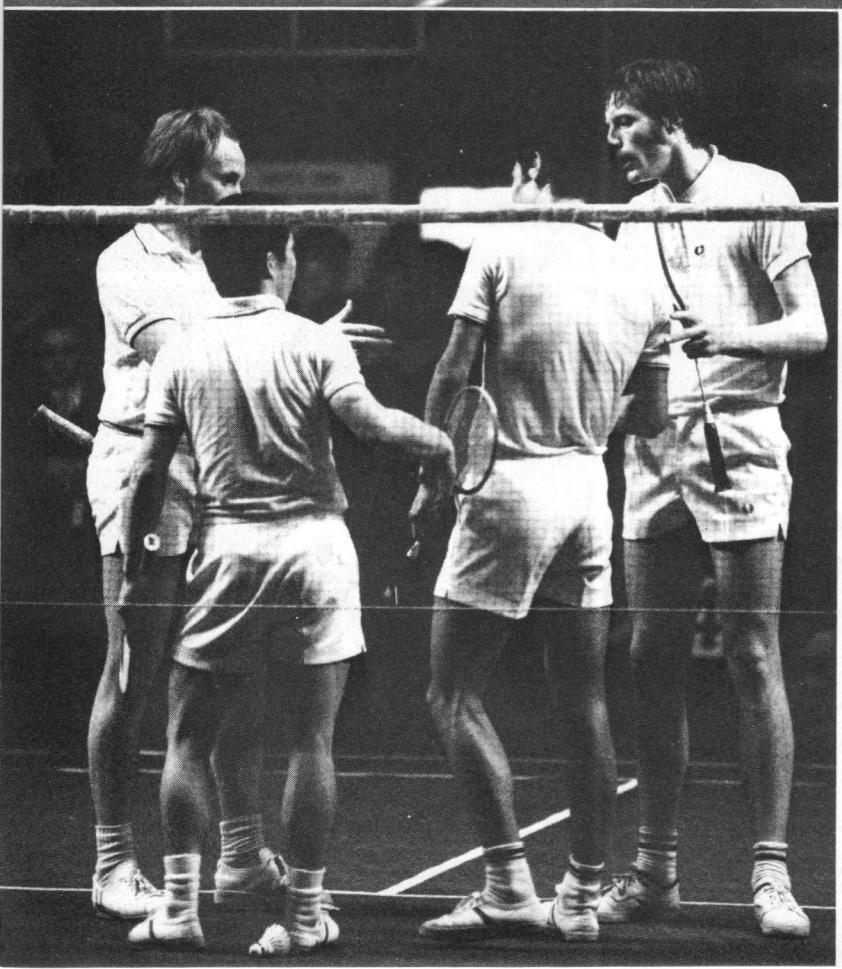


3回戦を終え，ホッとする二人



池田，けんめいのスマッシュ





●男子ダブルス準々決勝

〝弁慶〟イギリス、〝牛若丸〟日本に完敗

池田・栂野尾組は、準々決勝でイギリスのバリヴァン・キッド組をファイナル・ゲームを17－16の大接戦で破り、ついにベスト4へ進出した。

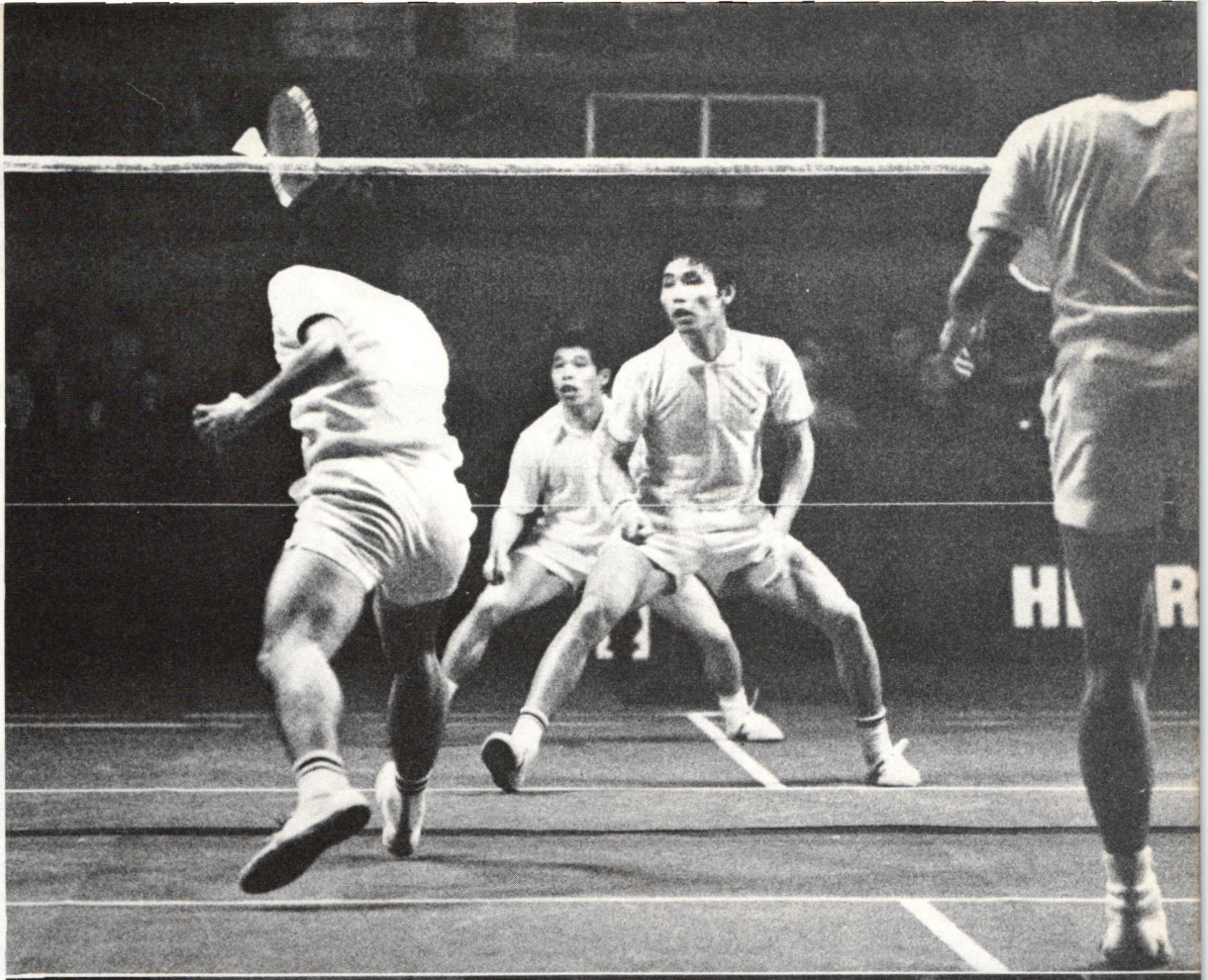
バリヴァン・キッド組も高い打点からシャトルを沈め、池田・栂野尾組を苦しめた。

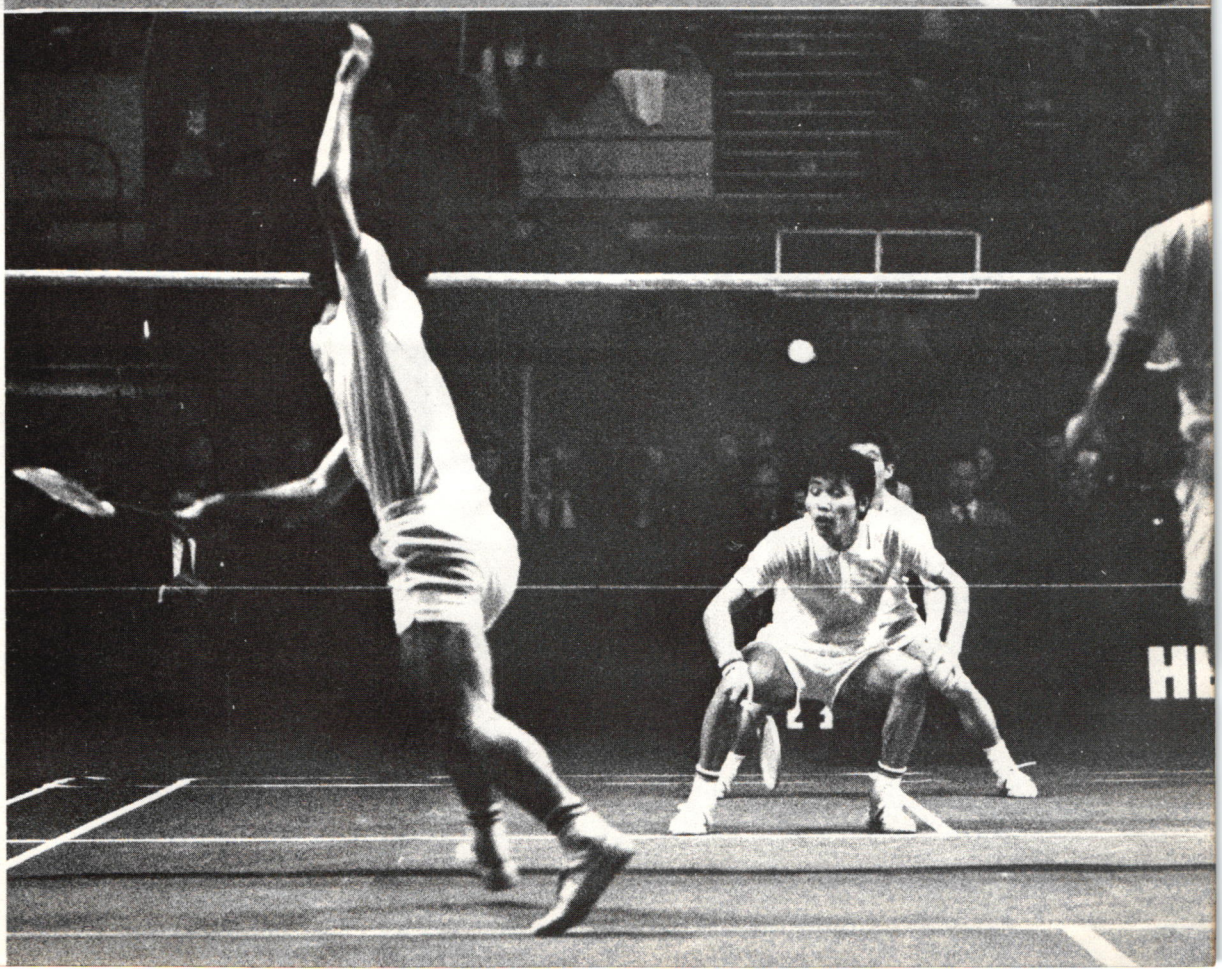
しかし、日本ペアはねばりにねばって勝利をものにした。

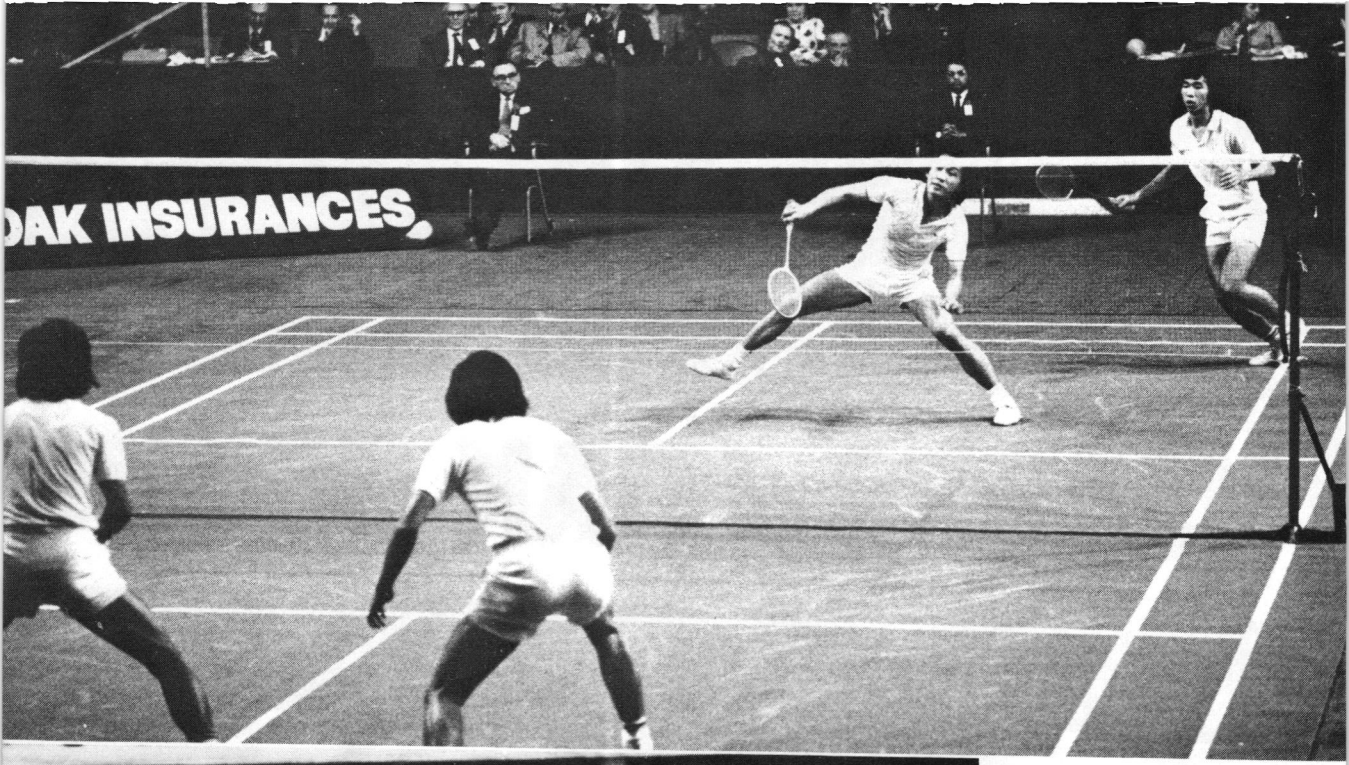
大男を向こうに回し、小柄な池田の大奮闘と栂野尾のさえたプレーに大きな拍手がわいた。

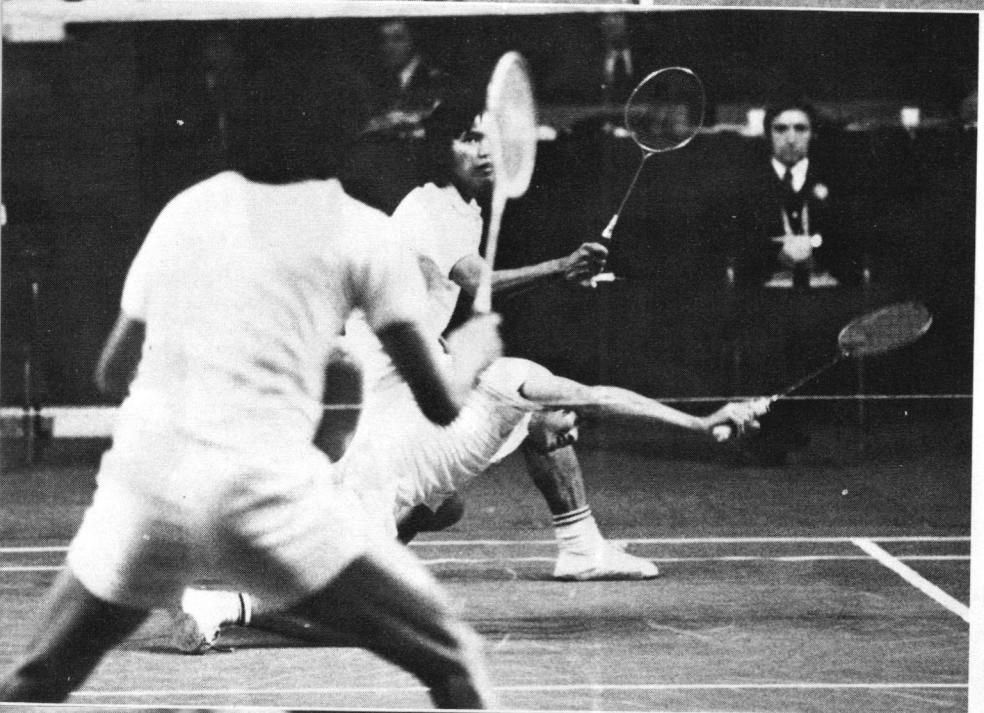
試合終了後、ネットをくぐって握手を求める池田・栂野尾に、イギリスペアも健闘をたたえた。

☆準決勝　対チュンチュン・ワジュディ組―チュンチュンのすばやいプッシュに日本ペア手が出ず!!







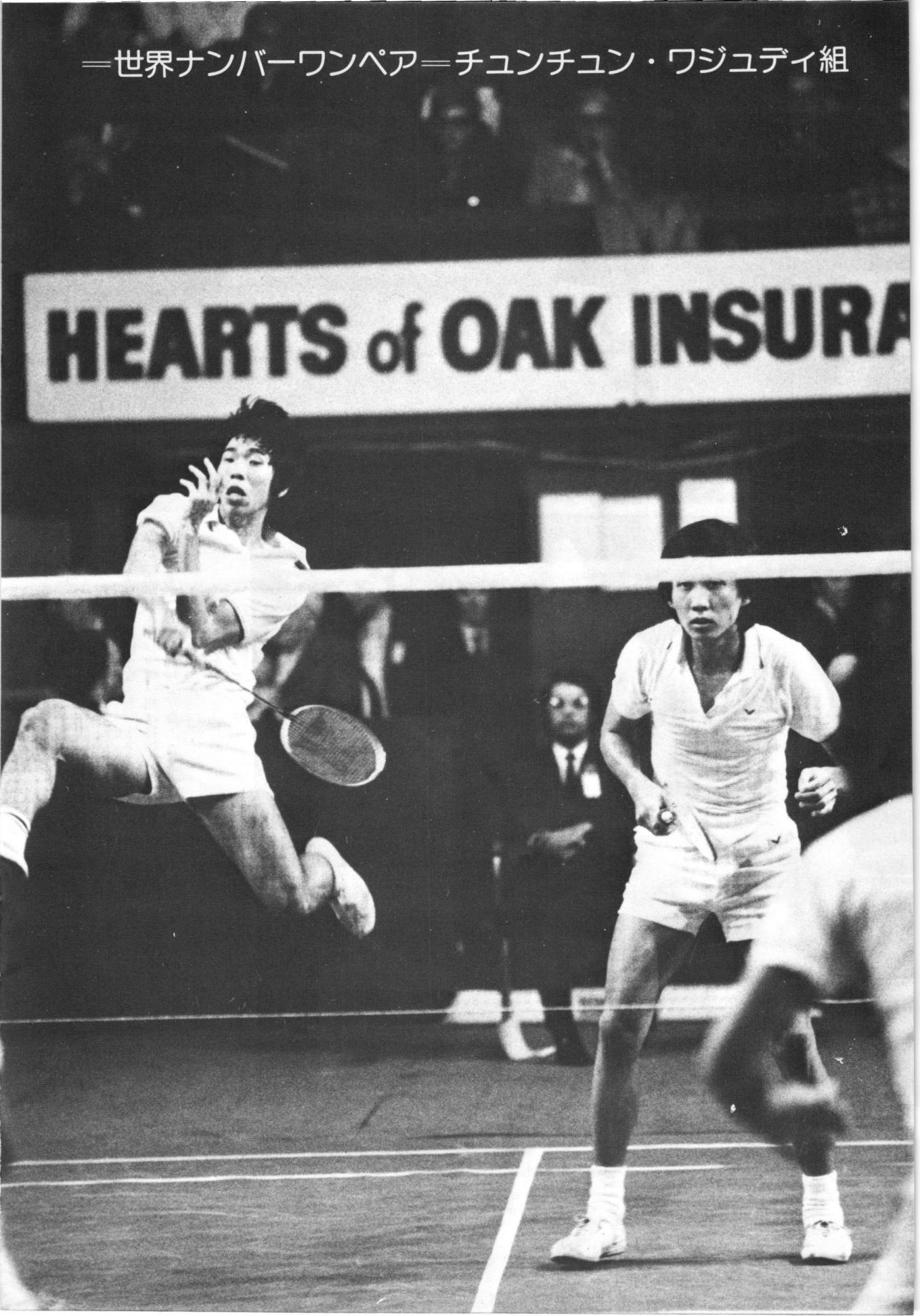




インドネシア同士の決勝―チュンチュン組強し

男子ダブルスは、インドネシア同士の決勝となった。チュンチュン・ワジュディ組は終始先手をとって圧倒し（写真上・ワジュディのスマッシュ）、ダイビング・キャッチなどけんめいに食い下がるクリスチャン・スミミラト組（写真中、下）のファイトも及ばなかった。

この両ペアとも、日本チームにはないスピードをもっており、このスピードにどう対処するかが日本男子の最大の課題といえよう。



＝世界ナンバーワンペア＝チュンチュン・ワジュディ組

表彰式を終え，ゆうゆうと引きあげるチュンチュン（右）とワジュディ



水鳥 検定合格球

ファストゴールド

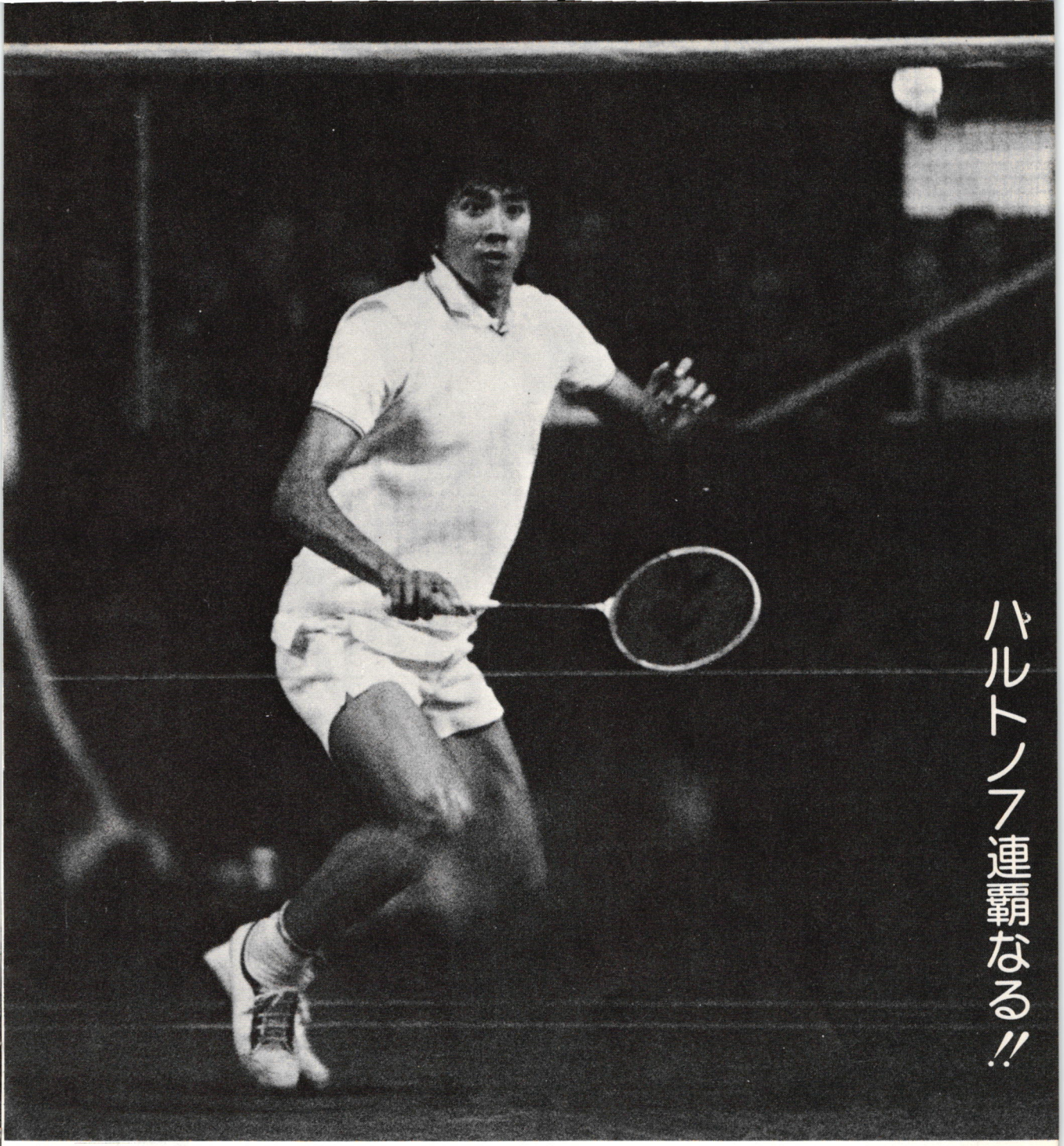
ファストシルバー



ファスト印シャトル
コック 製造発売元

有限会社 ジャワ商会

山形市六日町7の28
電話 0236(33)0333(代表)



ハルトノフ連覇なる!!

男子シングルスは、インドネシアの星、ルディ・ハルトノが68年以来連続7回の優勝をとげ、エルランド・コプス（デンマーク）のもつ7回優勝の記録（58、60～63、65、67年）に追いつくかどうか注目された。

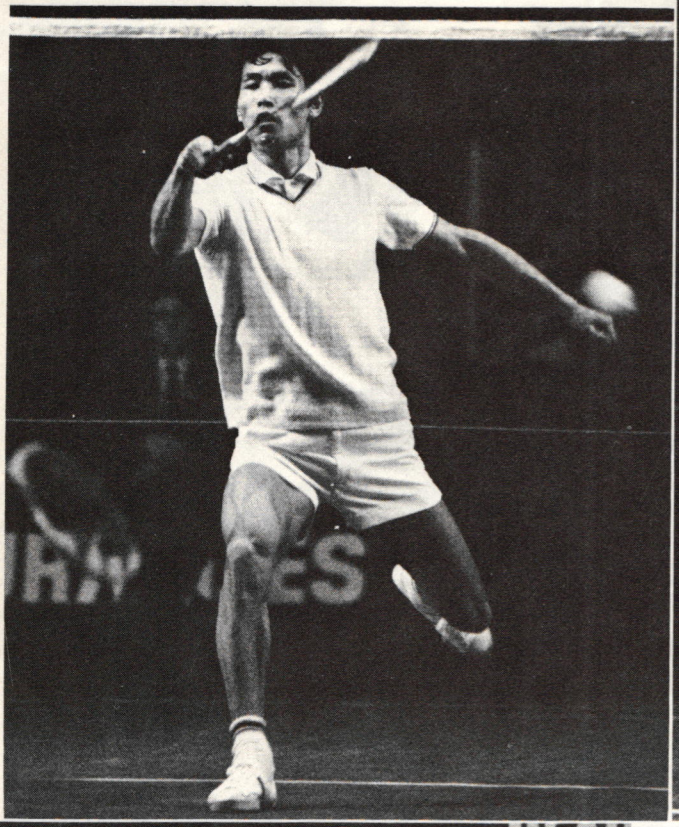
ハルトノは決勝で、パンチ・グナラン（マレーシア）の果敢な攻撃を受け、一時は敗れ去るかと思われたが、冷静な判断と配球が実を結び、偉大な7連覇をとげた。

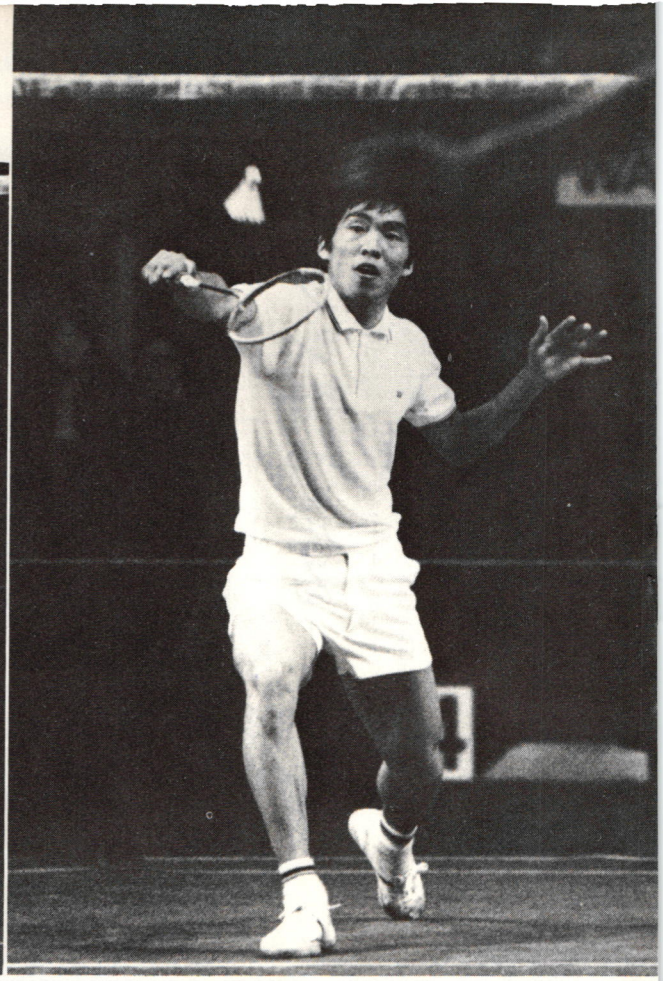
日本勢は、残念ながら栂野尾がソウ・スウィ・リャン（マレーシア）を破って二回戦に進んだだけで、池田はウェトナール（イギリス）に、銭谷はスティーブンス（イギリス）に、それぞれいいところなく完敗した。

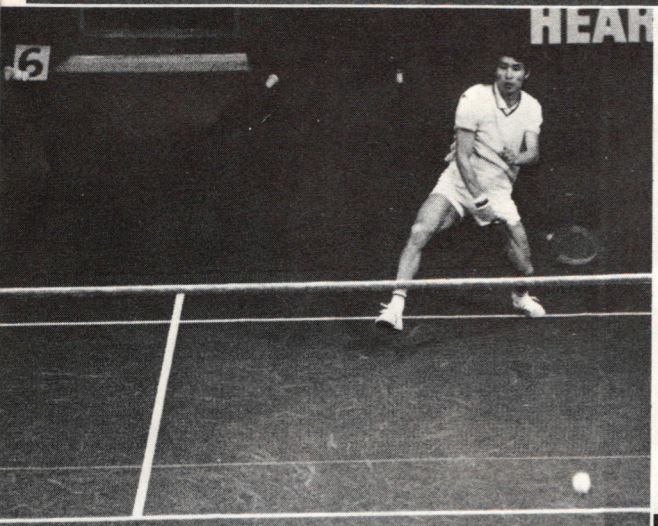
健闘した栂野尾もスウェーデンの名プレーヤー、スター・ジョンソンのスピードの前に、1－15、1－15のストレート負けを喫した。

男子シングルスにおける日本の立ち遅れは甚しいものがあり、今後は、積極的に海外各国と交流するなど、とくに隣国である中国選手から学べるものはすべて学ぶといった具体的対策が緊急時であろう。

梅野尾はS・S・リヤンを破って2回戦へ（下）
銭谷はスティーブンスに苦杯（右）

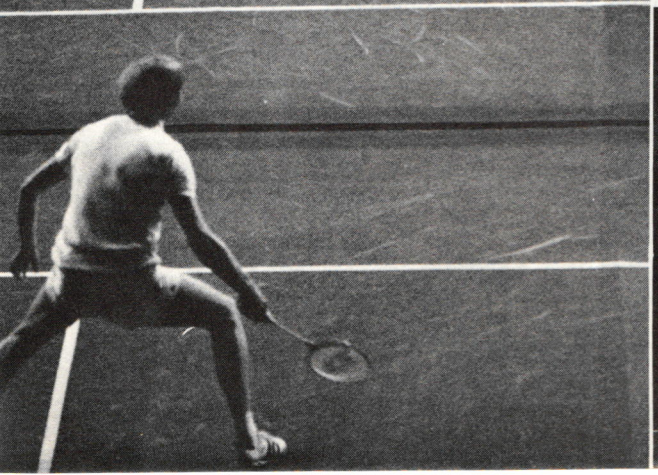


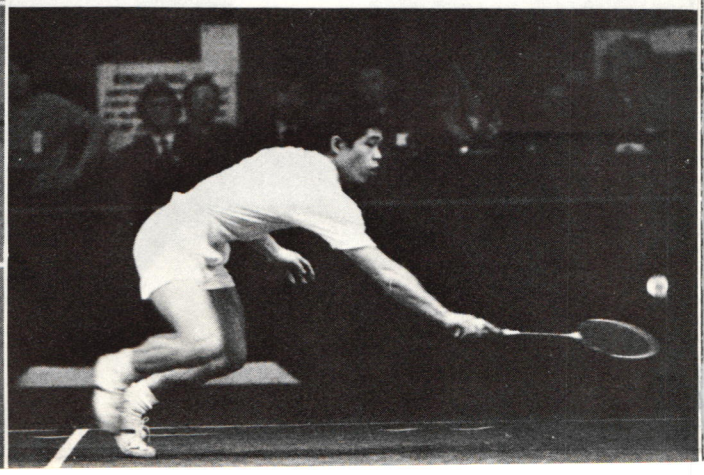




無念！
3回戦へ進出できず

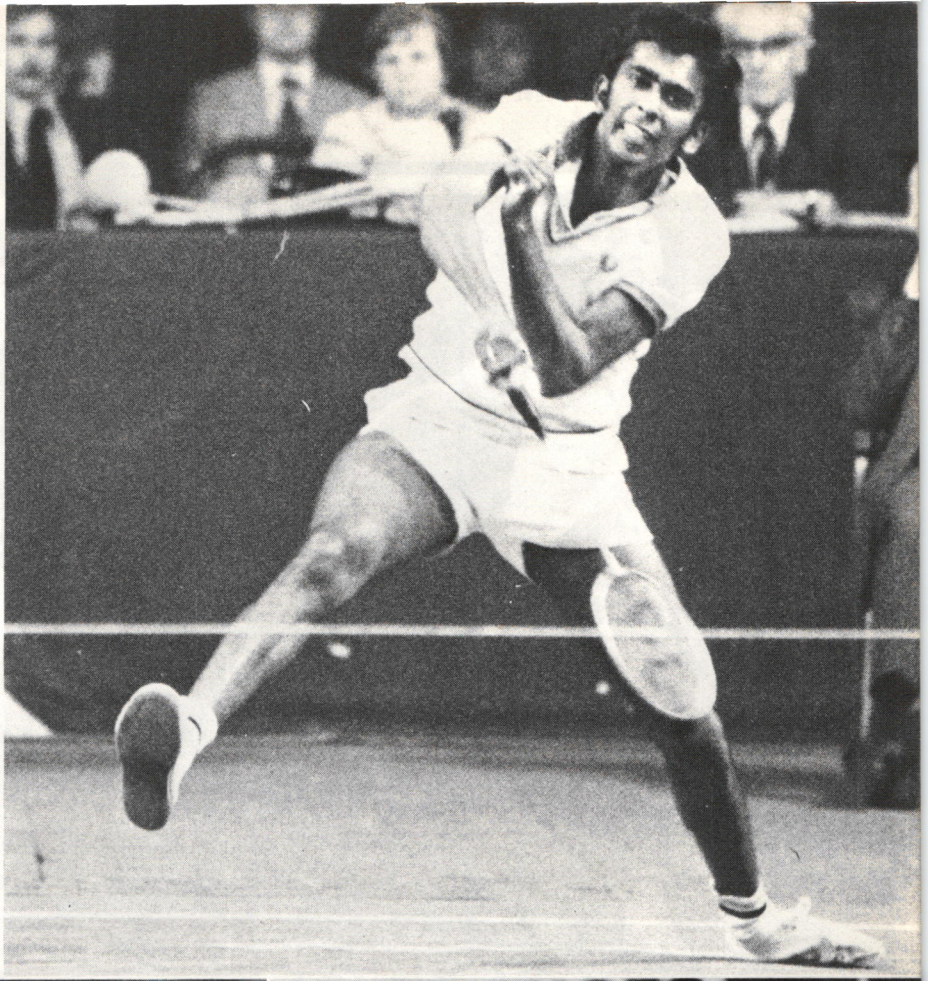
梅野尾ただ1人2回戦へ進んだが
スター・ジョンソンに完敗した（左）
池田はP・E・ウェトナールに敗れた（下）





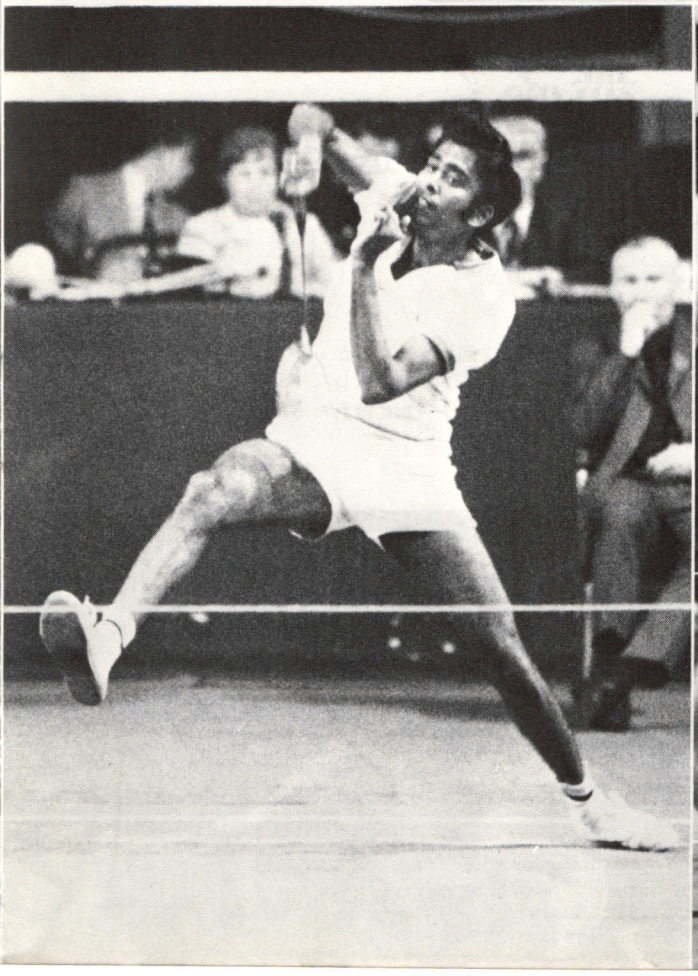
決勝＝

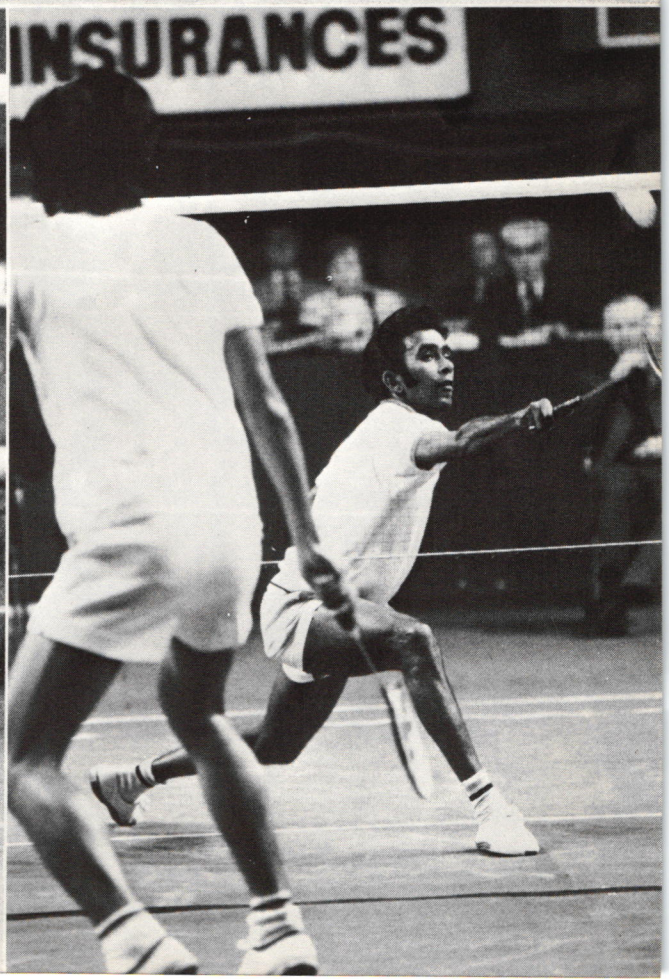
グナラン突っ走る——

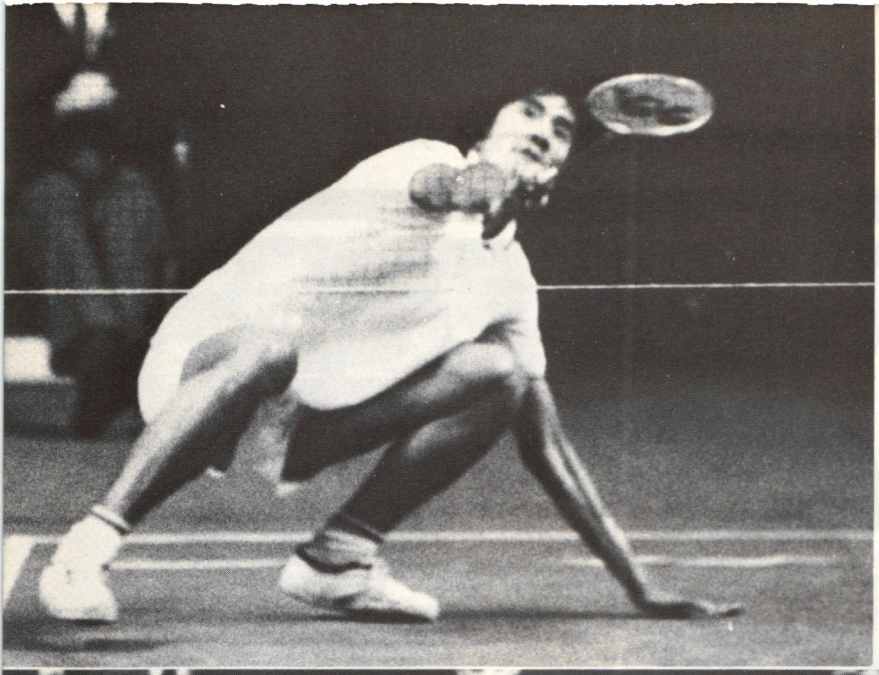


シングルス決勝で、パンチ・グナランは、スタートダッシュよく飛び出し、第1ゲームを15－8で先取、第2ゲームにはいっても快調にスマッシュを決め、7－1とリードした。

この時点では試合内容からみて圧倒的にグナラン優勢であり、場内にも〝ハルトノ危うし〟の声がささやかれた……。



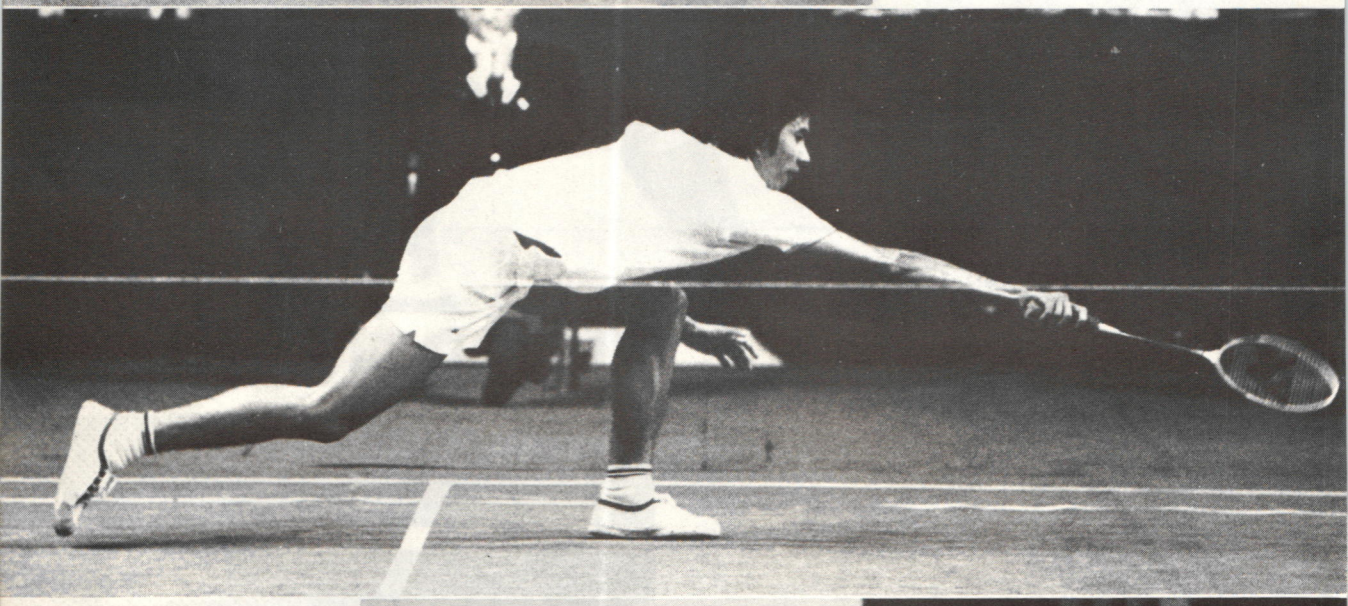


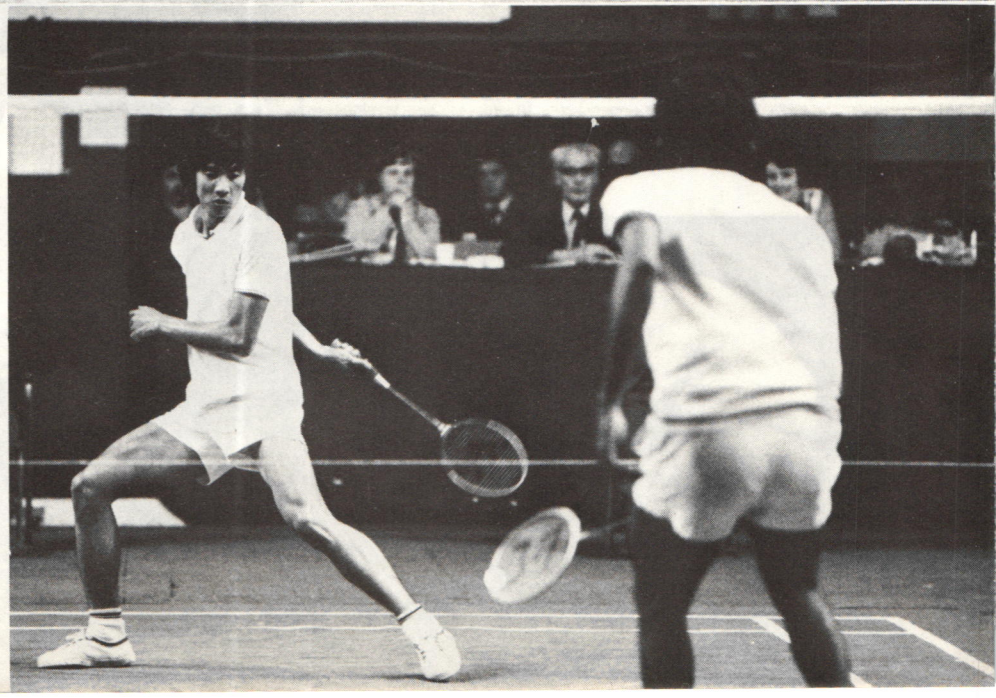


＝男子シングルス

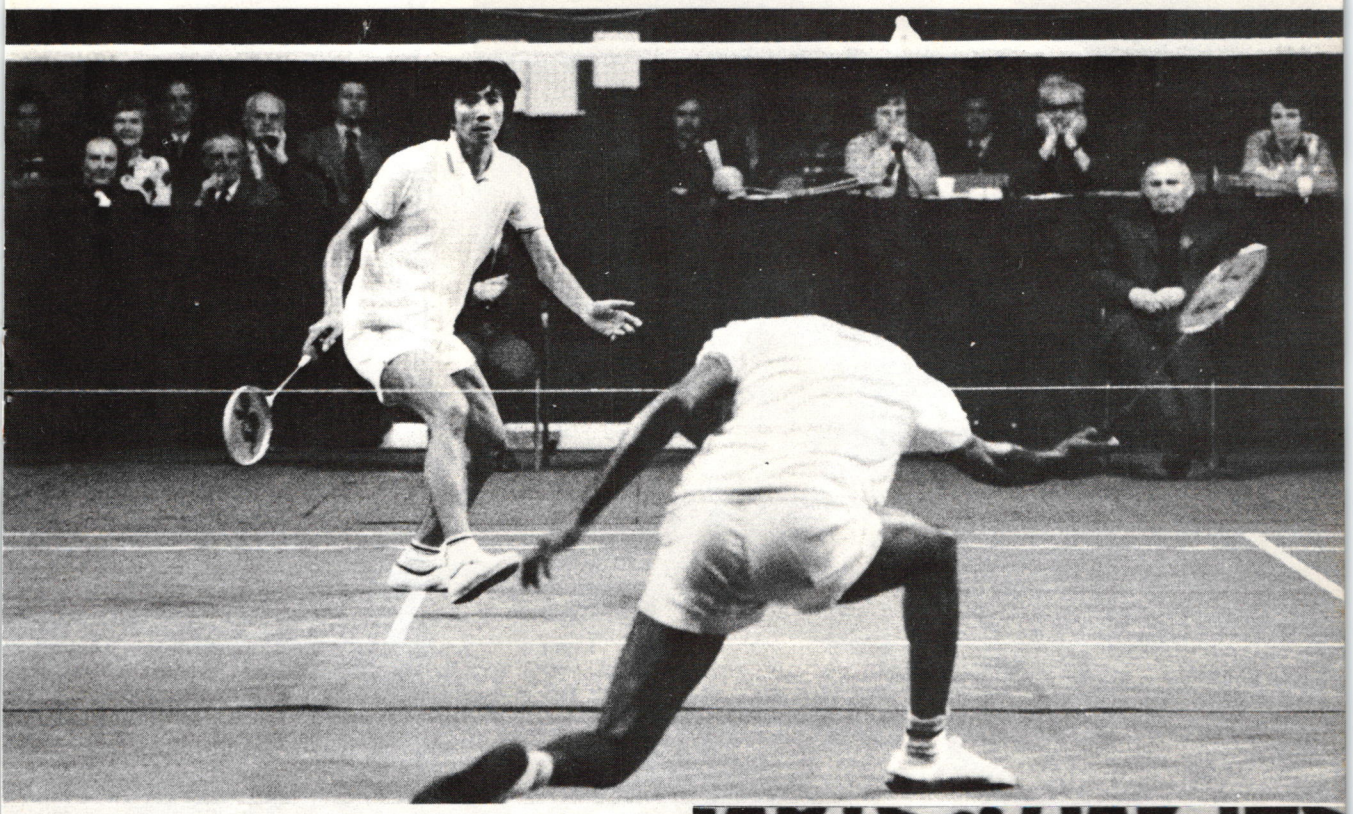
ハルトノ危うし―

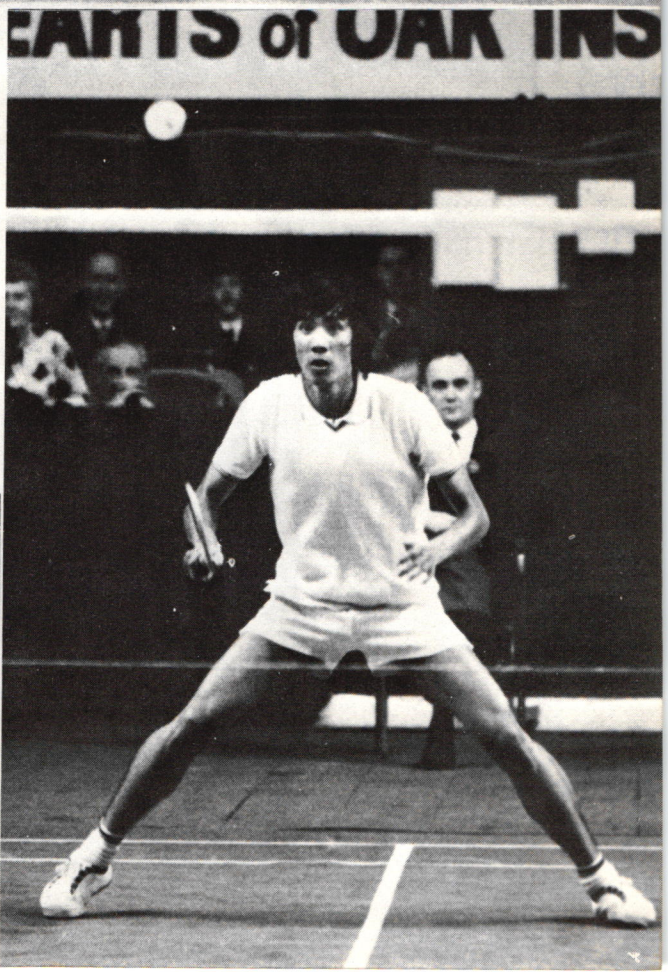
グナランの強烈な攻撃にあって、さすがのハルトノもタジタジとなった。丁寧に返球しようとするが、グナランに逆モーションをつかれたり、コートに腰を落としたり、ハルトノらしくないプレーが続いたが……。





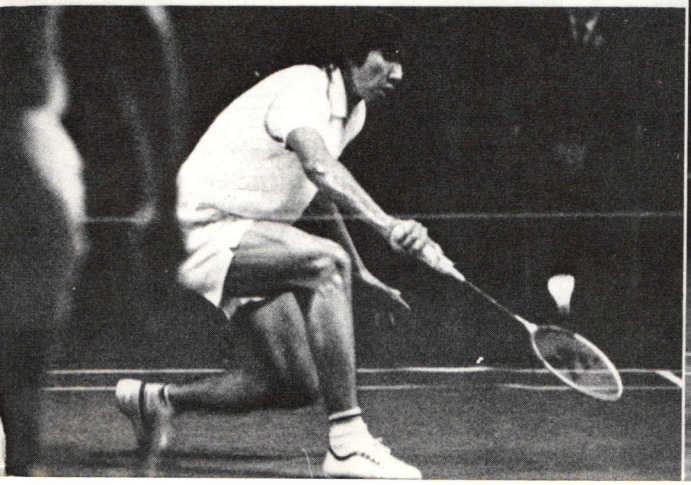
ハルトノ，ジリジリとばん回し，グナランを射程内に

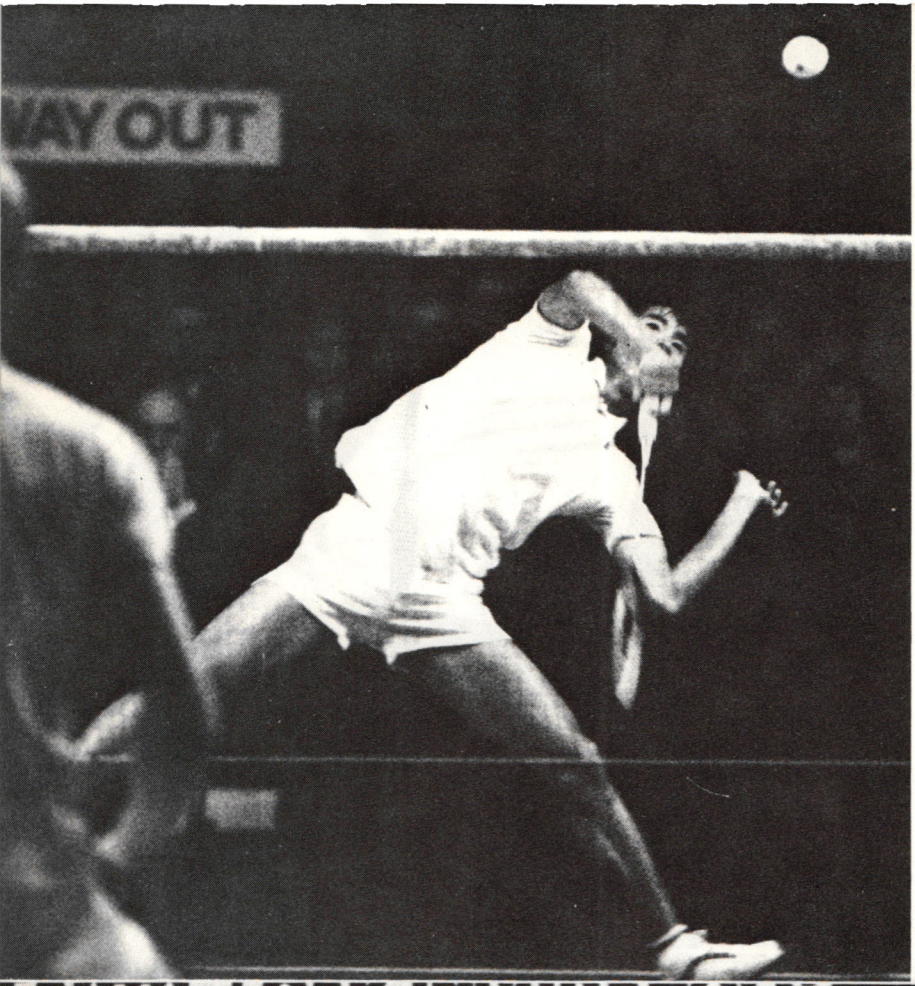




第2ゲーム1－7とリードされ、すでに第1ゲームを落としているハルトノは、非常なピンチに見舞われた。

しかし、第2ゲーム中盤からリードしているグナランに焦りがみえはじめた。〝ハルトノに勝てる〟という気持ちがかえって自分のプレーを乱してしまったのであろう。あれほど快調にビシビシ決めていたスマッシュもアウトが多くなり、ハルトノはジリジリとばん回、ついにファイナルゲームに持ち込んだのである。

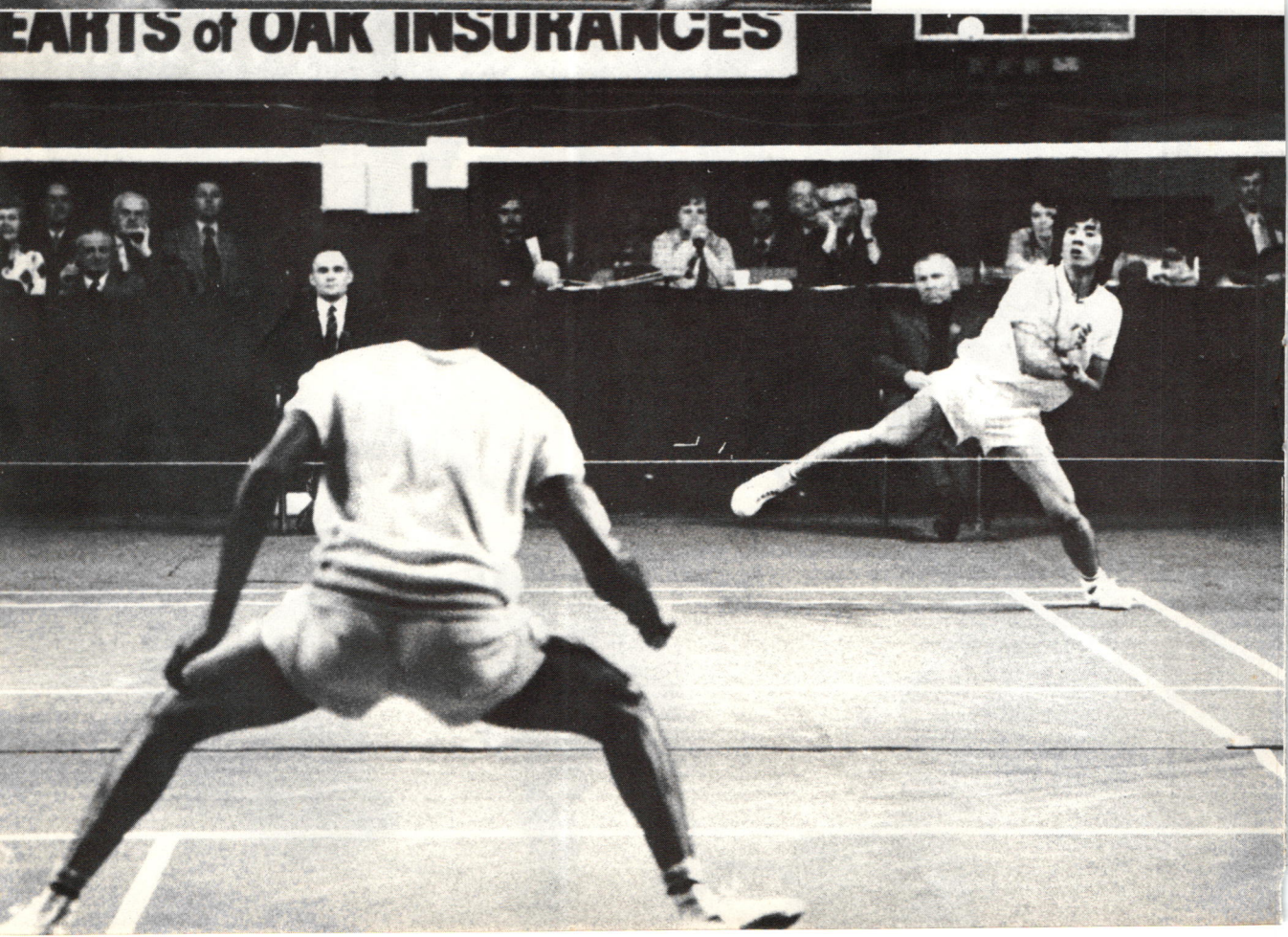




7連勝目前—ハルトノ冷静な試合運び

グナランの焦りを見逃さず、第2ゲームをとったハルトノはファイナルゲームにはいっても冷静にゲームを進め、ついに14—10とマッチポイントを握った。第1ゲームを落とし、第2ゲームも大きく引き離されていたハルトノの、これほどまでの逆転をいったい誰が予想しただろうか。

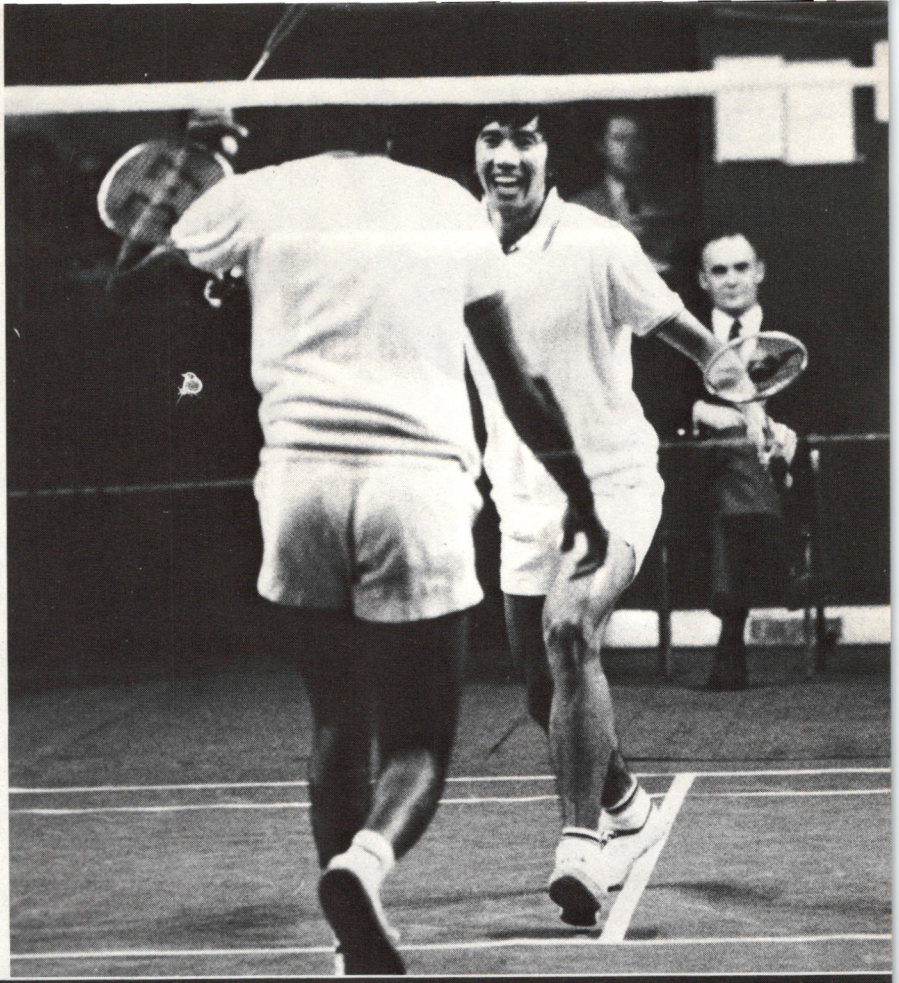
顔色を変えることなく、常に自分のペースを守ったハルトノは、やはり〝偉大な〟プレーヤーであり、インドネシアの星は〝世界の星〟へさらに躍進したといえよう。



驚異の大逆転!!

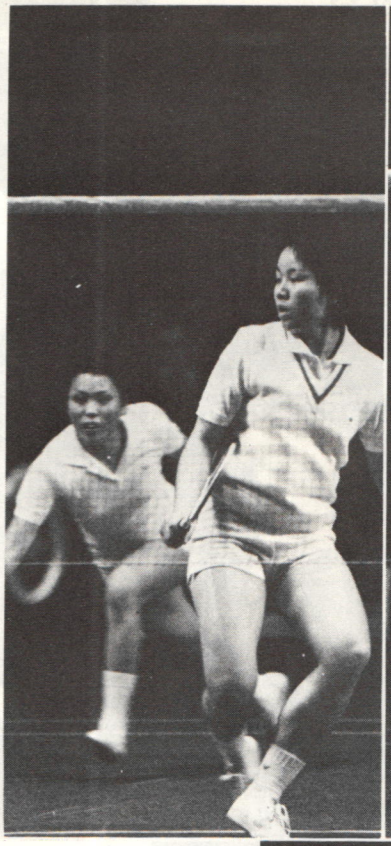
第2ゲーム中盤からジリジリとばん回していったルディ・ハルトノはついに信じられないような大逆転に成功した。

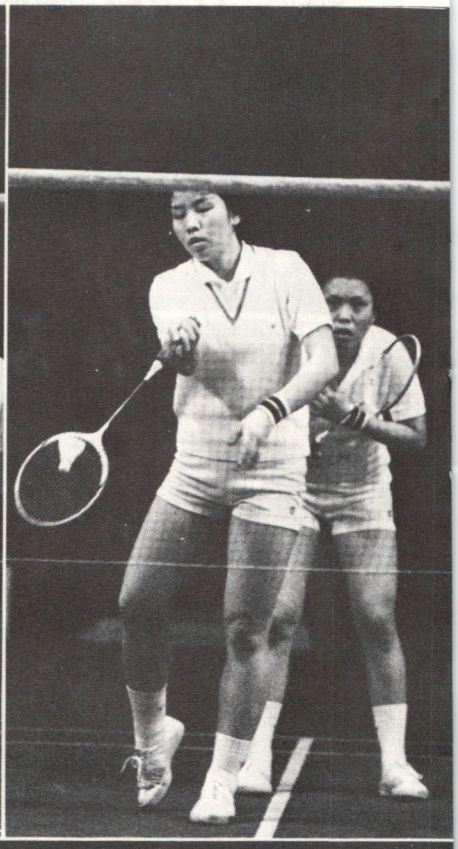
ハルトノの7連勝が決定した一瞬、自分のミスによって敗れたくやしさを隠し、悪びれずにハルトノのコートへ飛びこみ、握手を求めるパンチ・グナランの後姿もさわやかなら、ハルトノの満面に喜びを表わした表情も印象的である。

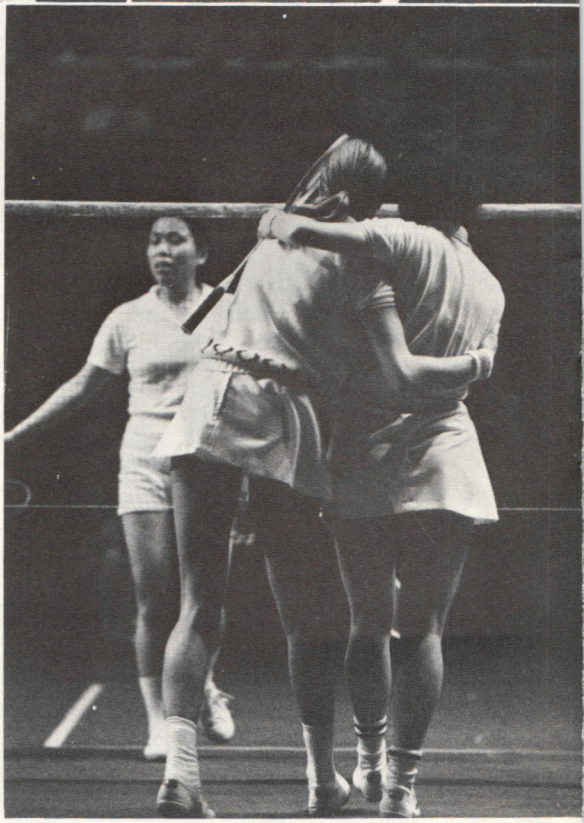




■女子ダブルス■







湯木・池田組は二回戦で地元イギリスのG・W・クーパー・D・G・スミス組にファイナルゲームの苦戦を強いられたが、準々決勝に進出、ベスト8入りを果たした。

そしてベック・ギルクス組と対戦、一瞬の目を離すスキもない好試合を展開したが、13－15、13－18の接戦の末、惜敗した。

しかし、湯木の好リードで自分の力をよく発揮した池田にもよい経験となり、また自信ともなったのではないだろうか。

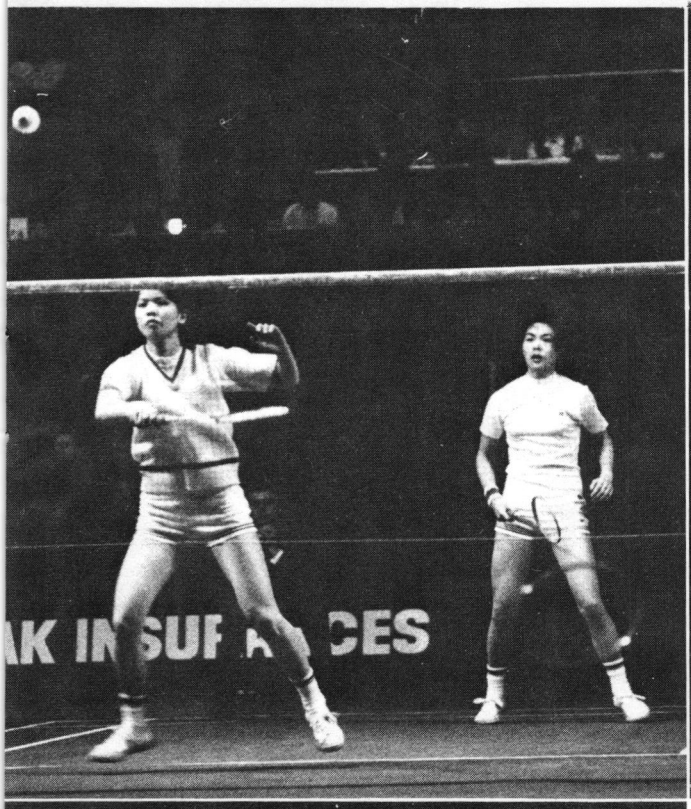
ミカサ三田

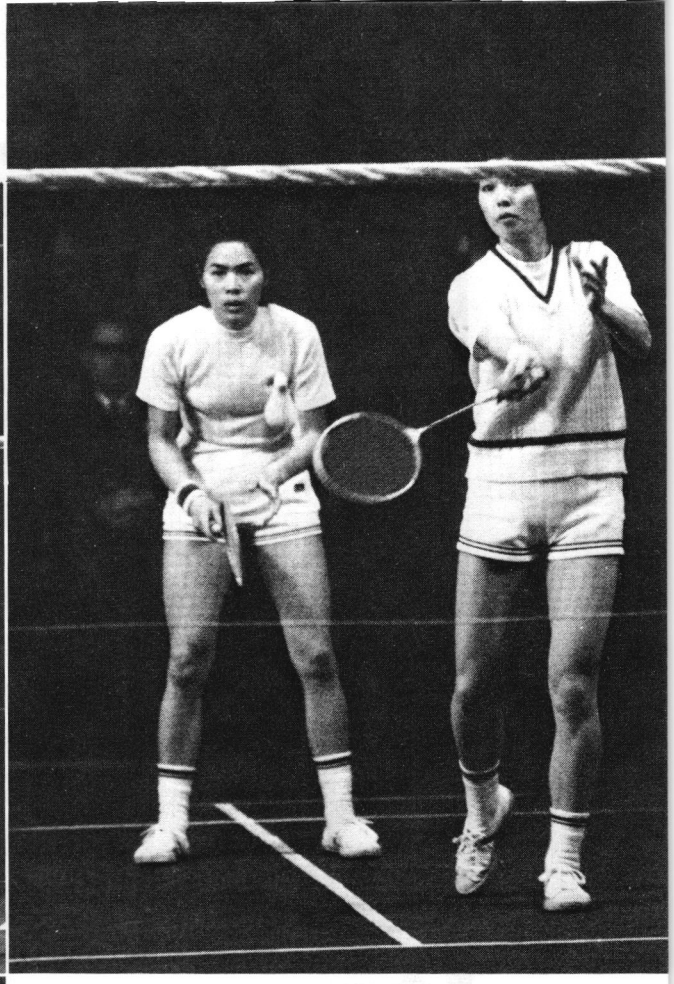
平均年令27才のヤングパワー。

(045)651-2020

●横浜市中区石川町2-84

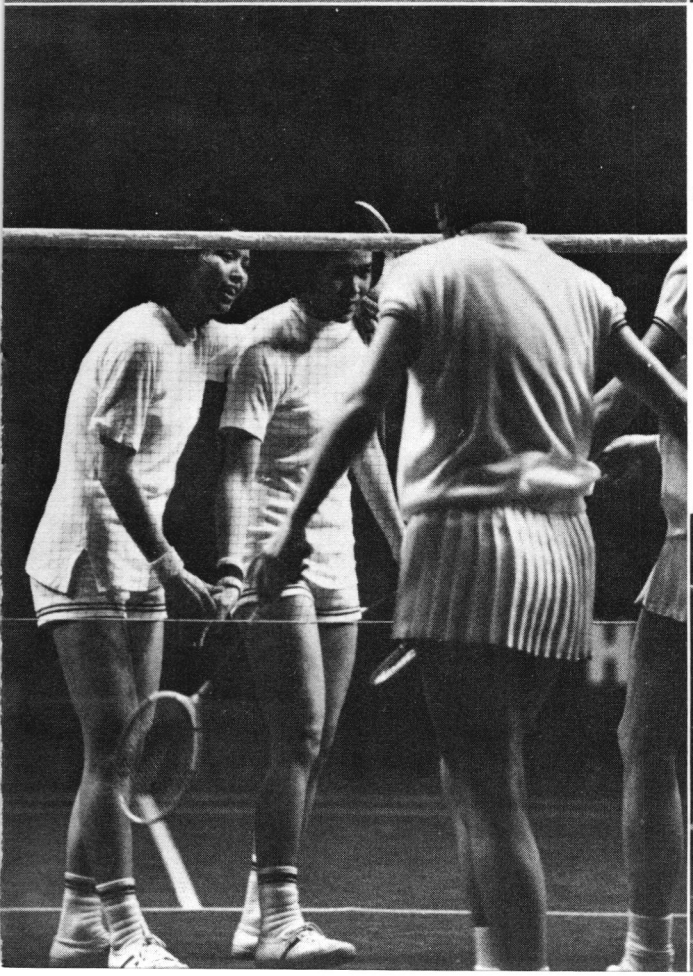
相沢・竹中組，夢破る……

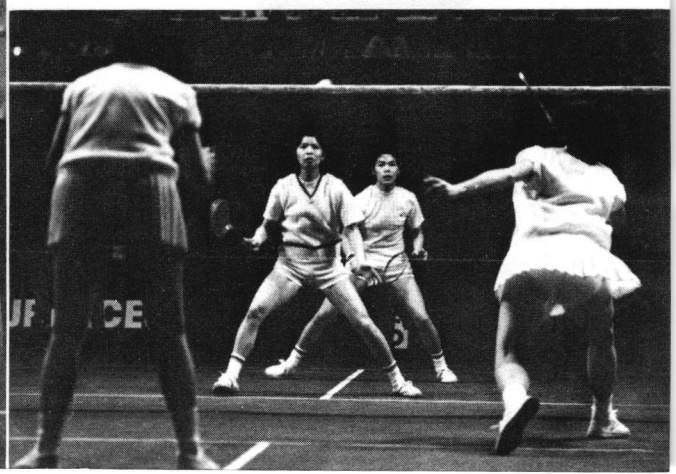




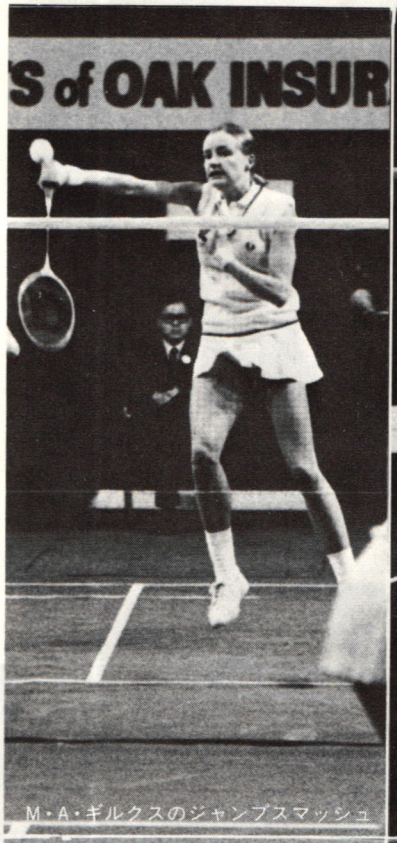
全英選手権大会三連勝をねらった相沢マチ子・竹中悦子組は、準々決勝でイギリスのM・ボクソール・P・E・ウェトナール組と対戦。さすがに過去二度の優勝経験をもつペア同士の対決で白熱したが、相沢・竹中組が調子が悪い状態から抜け出せないのに対し、イギリスペアは先手先手と攻め、2－0のストレートで勝利を手中におさめた。

三連勝の夢を破られた一瞬、相沢と竹中はお互いの健闘をたたえて手をとりあったが、その横顔には寂しさがあった。

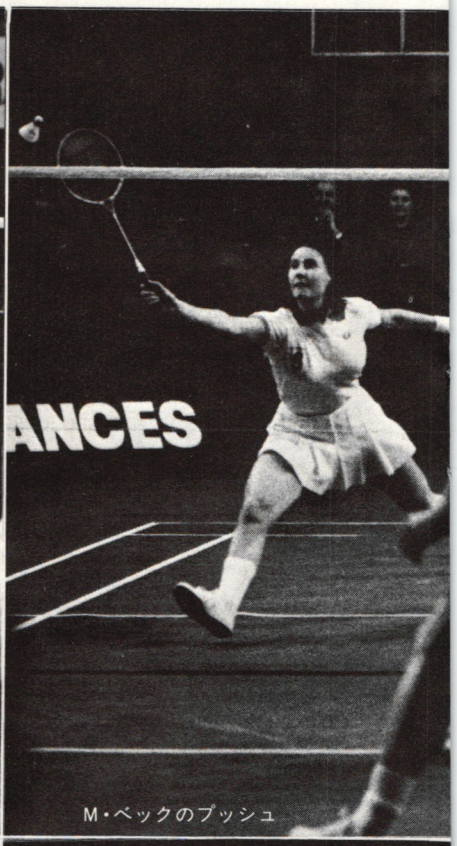




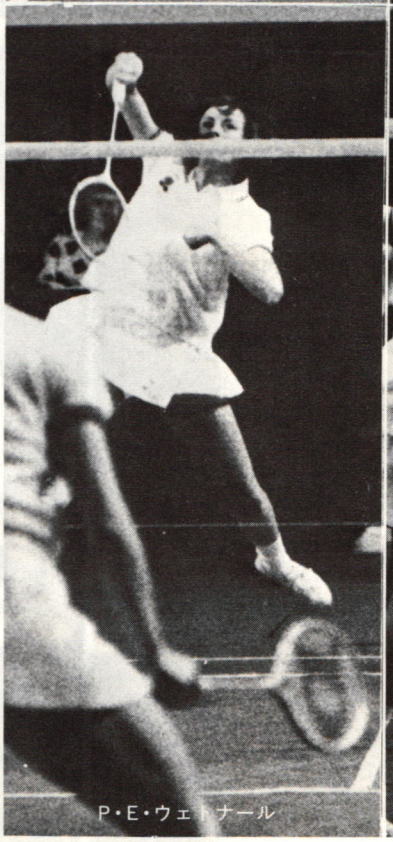
イギリスの誇るプレイヤーたち

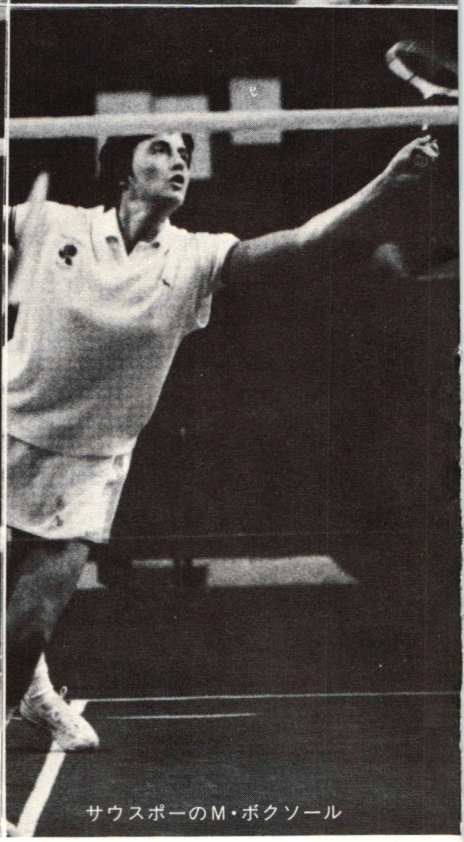


M・A・ギルクスのジャンプスマッシュ



M・ベックのプッシュ


P・E・ウェストナール


サウスポーのM・ボクソール

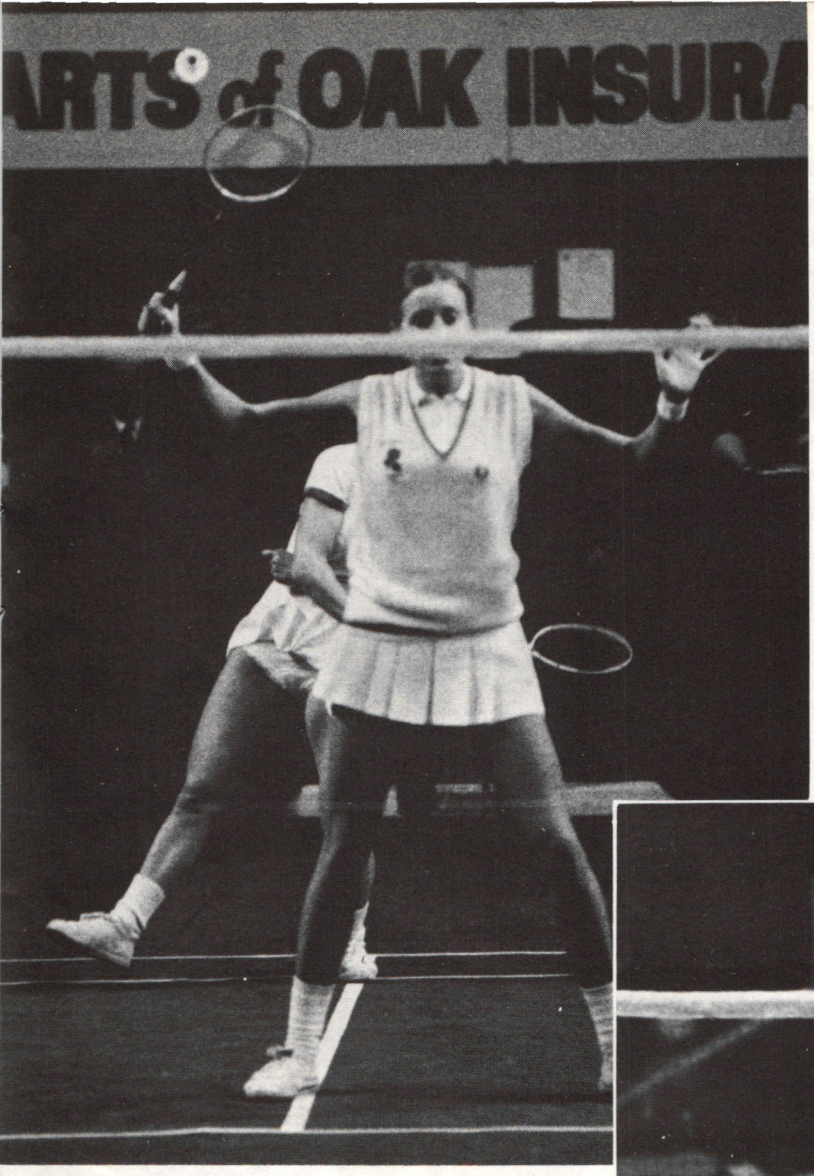
ヤマハテニス倶楽部

平均年令27才のヤングパワー。

(045)651-2020

●横浜市中区石川町2-84

ベック・ギルクス組
優勝の瞬間





女子ダブルス決勝は、第二ゲームにはいってもつれ、セッティングの接戦となったが、終始攻撃に回ったベック・ギルクス組が勝利を得た。

長身ギルクスがネット前に立ちはだかると、小柄なベックの姿は見えなくなってしまうほどである（写真上）。初優勝を決めた一瞬、ギルクスとベックは抱きあって喜んだが、決勝にイギリスペアが進んできたことは来年のユーバー杯防衛をねらう日本にとって恐威となろう。



世界ナンバーワンペア＝初優勝をとげ感無量

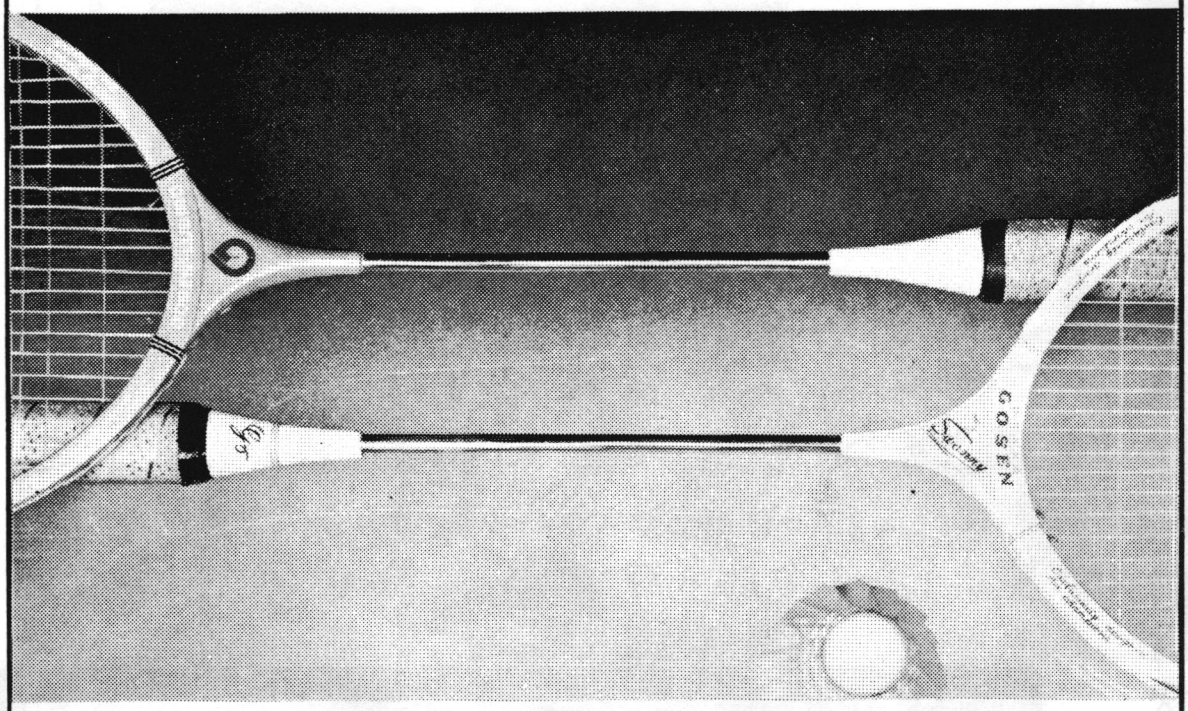
M・ベック（右）
M・A・ギルクス



決勝で敗れはしたが全力を尽して満足な表情

M・B・ボクソール（右）
P・E・ウェトナール

精緻。俊敏。この確かな手応え。
ロング・テーパード・シャフト。



LUBIRD & SWANNY

Gosen Badminton Racket



特殊合板の力強いフレームと、
従来のものよりさらに長くなった
クローム・テーパード・シャフトの強靭性
が強力なバイブレーションを生み出します。
ゴーセン・ルバード、スワニーのロング・シャフトコンビ
が逞しいラケットワークを可能にし、世界のバドミントン
界を陵駕し、そのシャープで逞しい手応えを披露します。

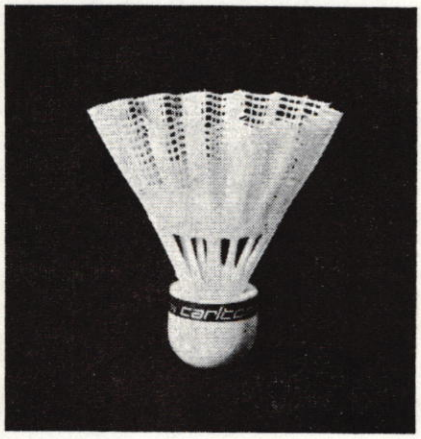
●No.B65ゴーセン・ルバード〔フレーム〕
●No.B60スワニー〔フレーム〕・タオルグリップ付

株式会社ゴーセン
本　　社・大阪市東区豊後町4　☎(06)942-5816(代)
東京営業所・東京都台東区鳥越1-26-1　☎(03)862-6576(代)

カアルトン ニュートーナメント は水鳥？

ナイロンを感じさせないナイロン。

新開発された、カアルトン〝ニュートーナメント〟シャトルは、ナイロンと云うよりも英国製高級水鳥シャトルに最も類似した性能を備えた、新しいシャトルです。



ニュートーナメントの特徴

●打球音が変った●ラケットから離れる感じが変った●ネットでのターンノーバ（回転）が変った●スピン●シャトルに対する視覚度（よく見える）がよくなった●飛翔のときの一貫した安定性が増加された。

メトロレジャー株式会社

東京都千代田区外神田5-6-4 TEL. 833-3661（代）

●混合ダブルス

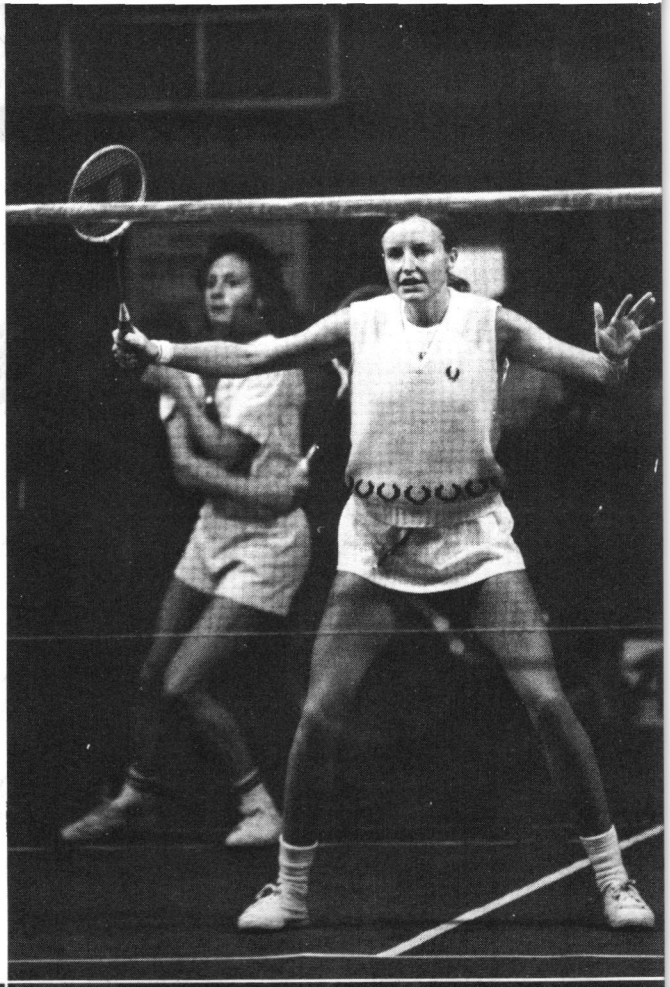
女子も男子顔負けの攻撃を展開

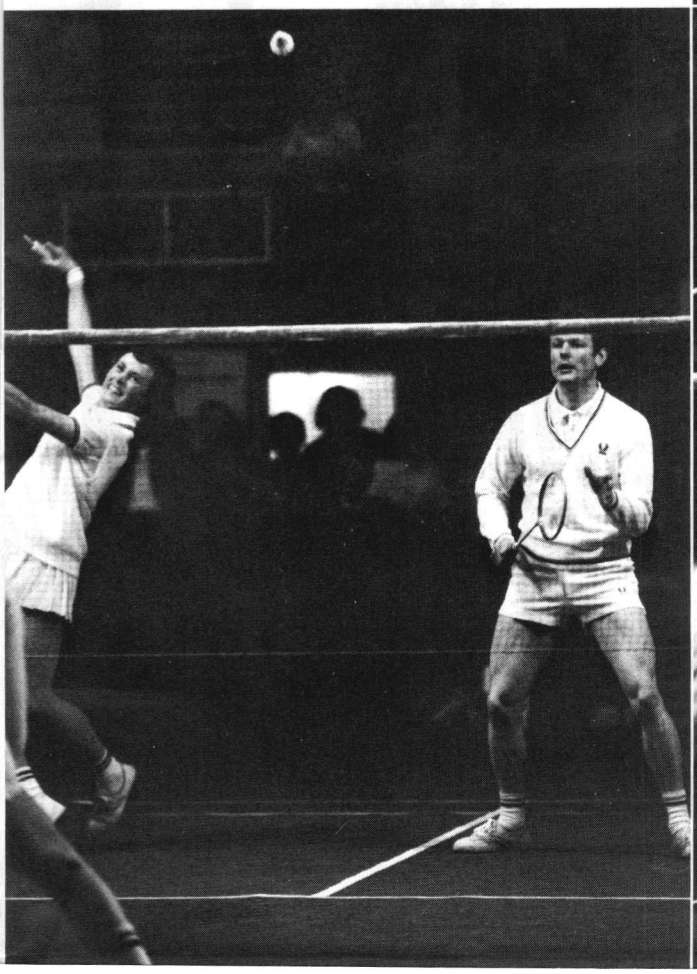
混合ダブルスでは、ベスト4にイギリスペアが3組も進出し、本場の面目を保った。

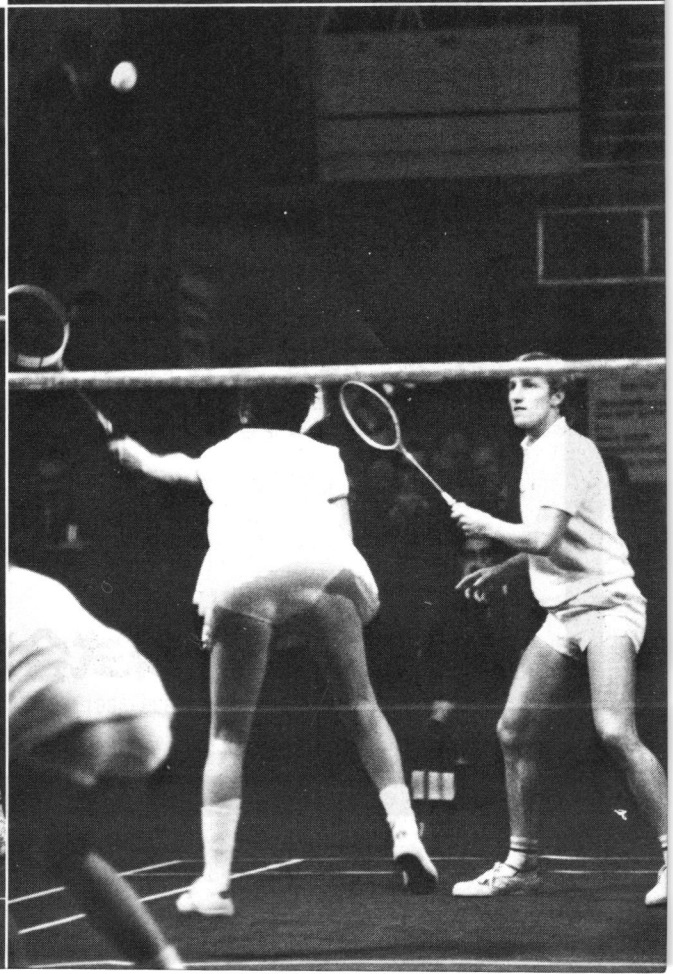
タルボット・ギルクス組は、ギルクスが前衛で両手を上げて立ちはだかるとまるで壁が出来たような感じである（右上）。

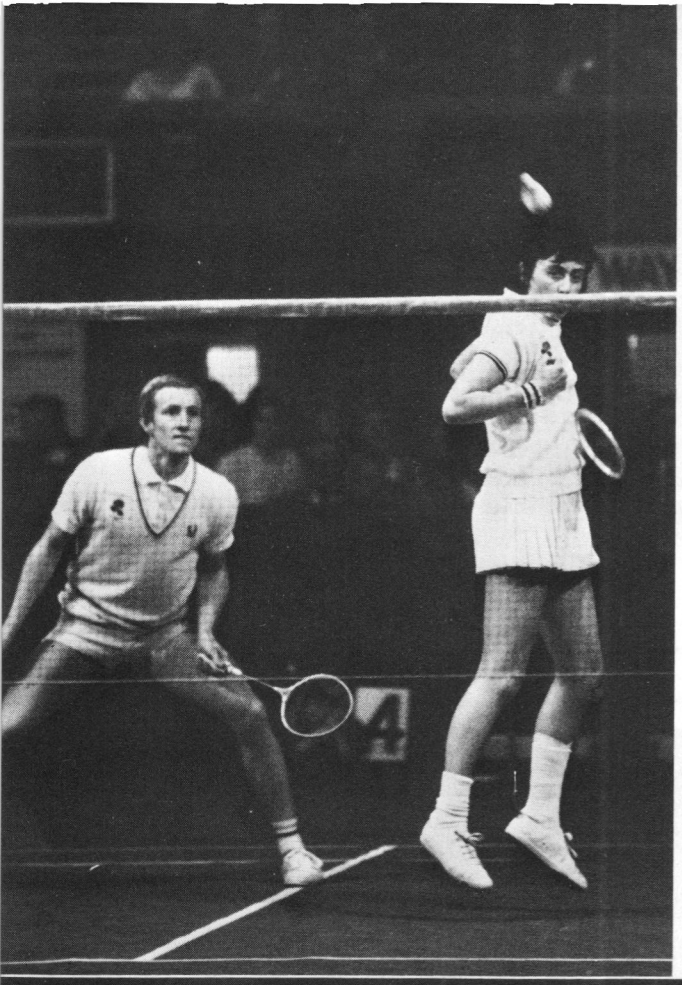
準決勝でこのタルボット・ギルクス組に敗れたトレジェット・ボクソール組も、サウスポーのボクソールがジャンプ・バックスマッシュを放つなど（右下）非常に鋭い攻撃をみせた。

優勝したエディ・ウェトナール組も、ウェトナールが長身を生かしてよくスマッシュを打ち攻めのプレーをみせた（左下）。





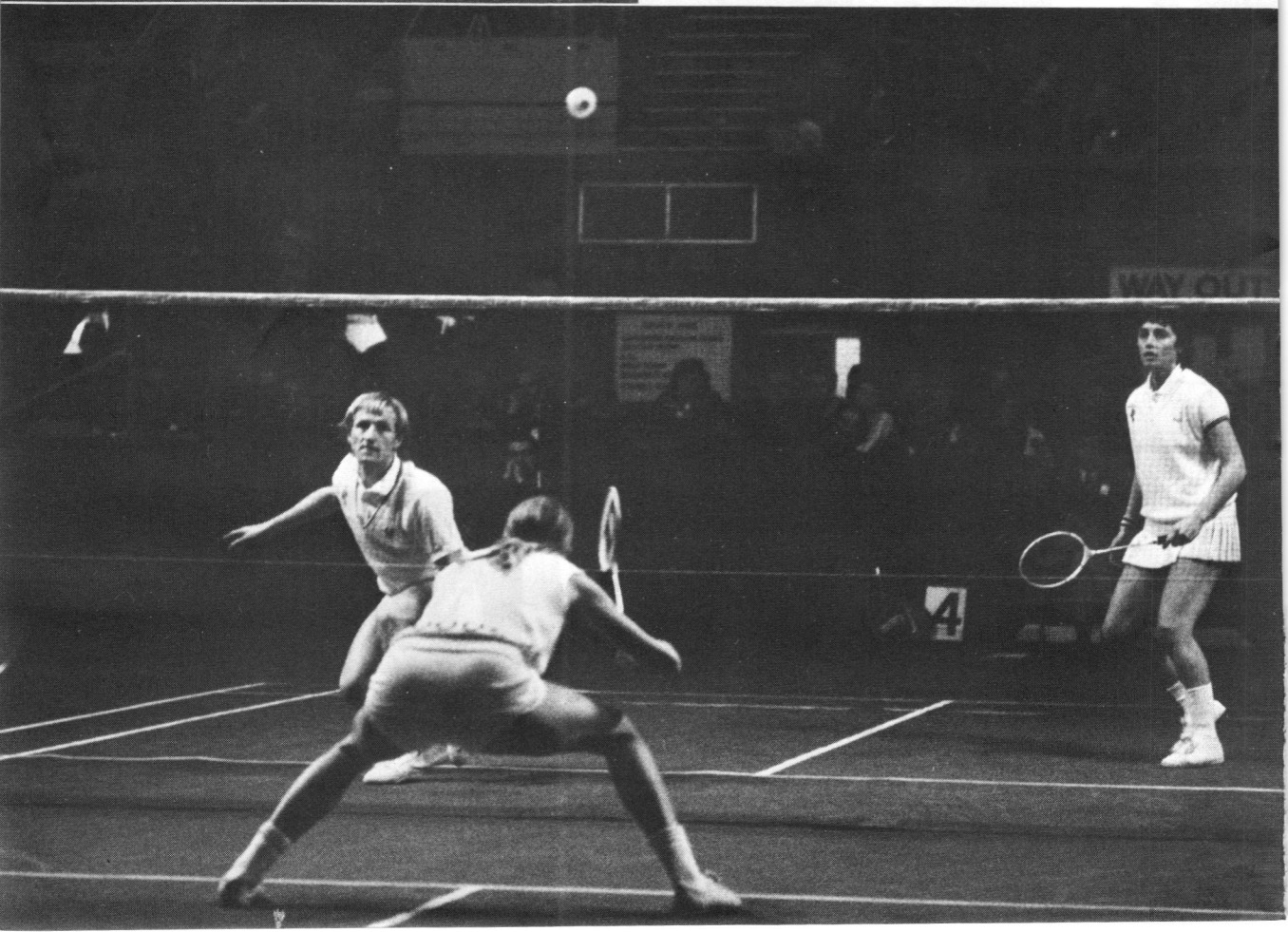




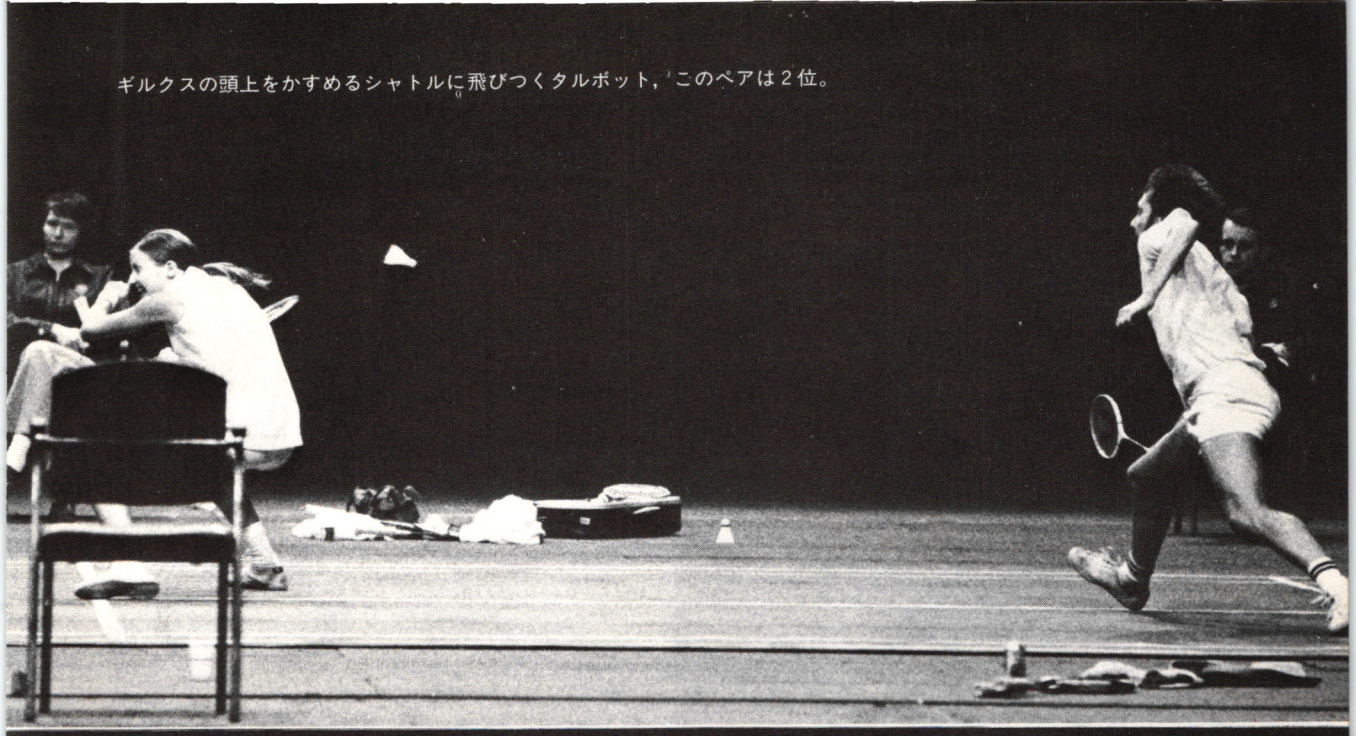
トレジェット・ボクソール組は3位に

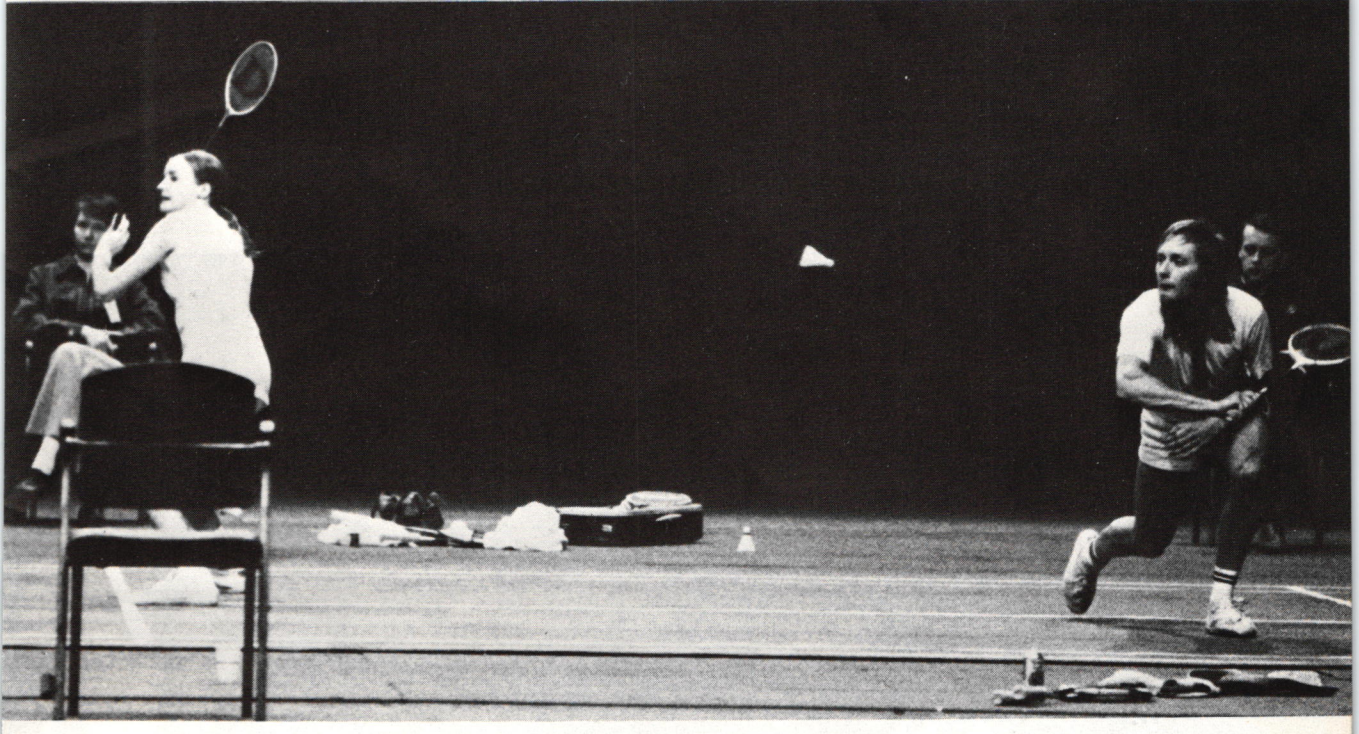
M・G・トレジェット・M・B・ボクソール組（イギリス）は、三回戦でF・デルフス（デンマーク）・J・V・ビューセコム（オランダ）組を2－0で降し、準々決勝でE・ハンセンU・ストランド（デンマーク）にも快勝、準決勝へ進出した。

しかし、準決勝で前年の覇者D・タルボット・M・A・ギルクス組に16－17、6－15で敗れた。



ギルクスの頭上をかすめるシャトルに飛びつくタルボット，このペアは2位。





講談社スポーツシリーズ

バドミントン

勝つための秘訣

堺 栄一 ●880円

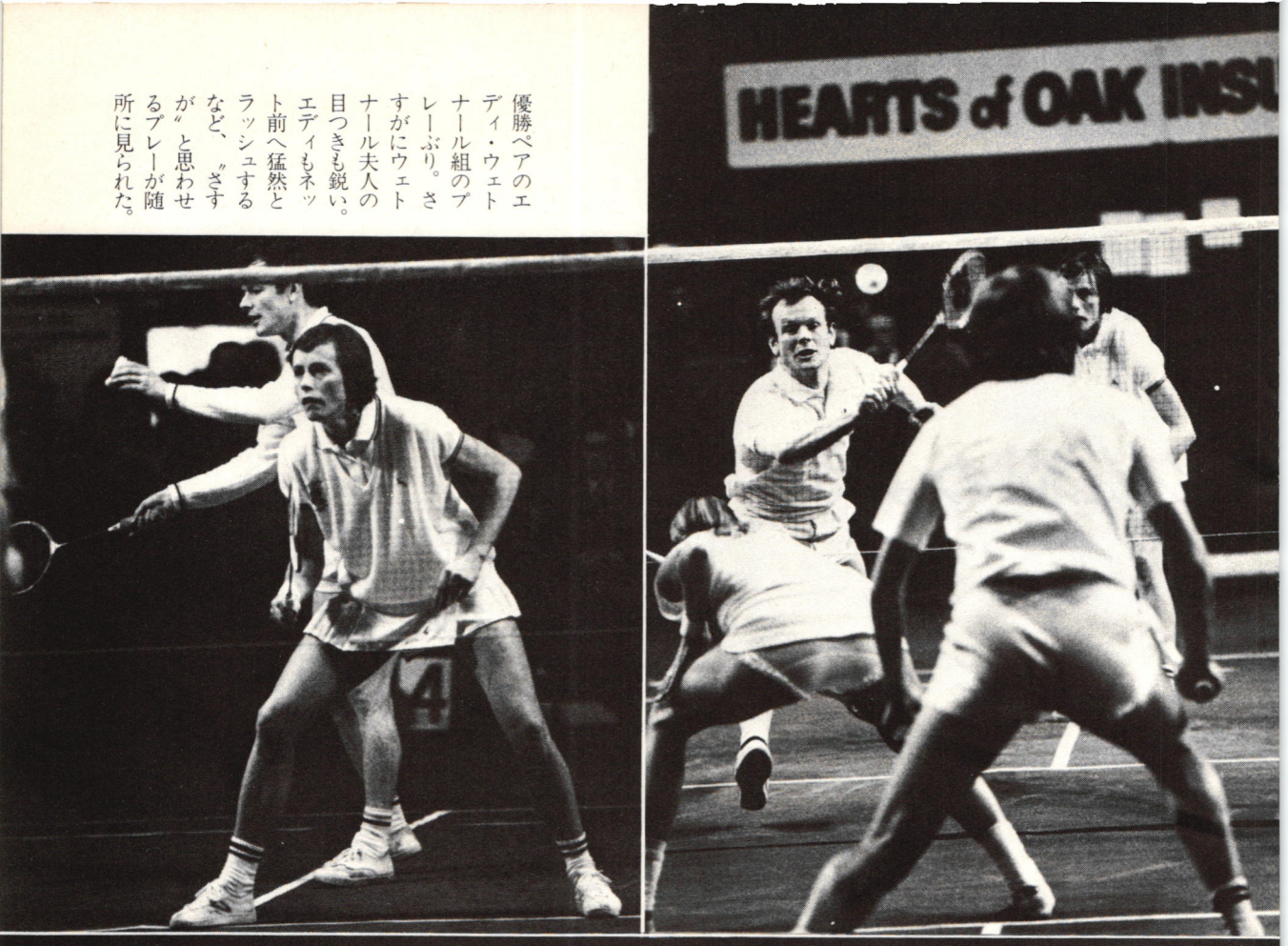
著者多年の体験をもとに，連続写真を豊富に使用して解説した，プレーヤー，コーチ必携の書。《増刷出来》

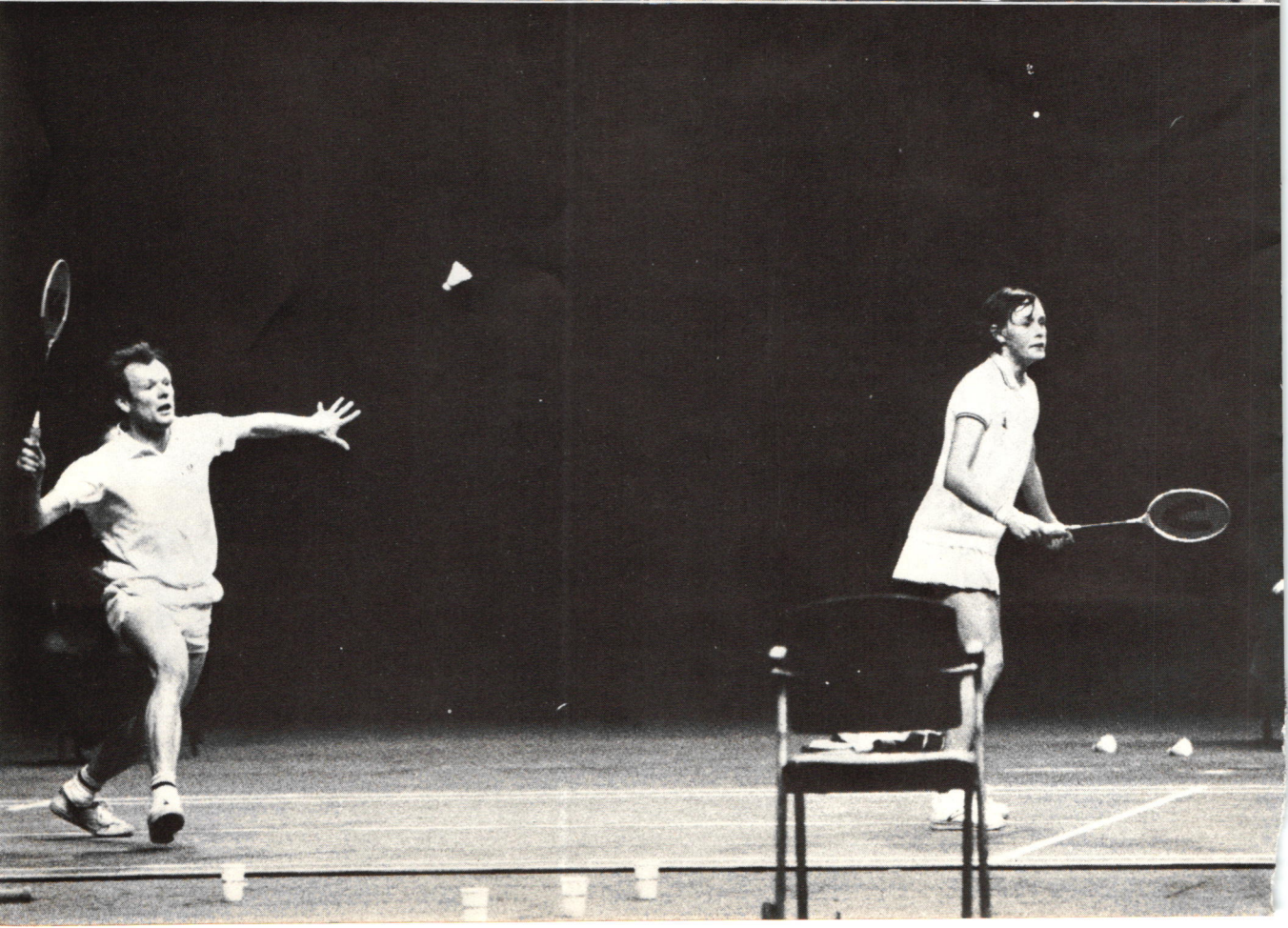
日本バドミントン協会
指導委員会委員長推薦



講談社

優勝ペアのエディ・ウェトナール組のプレーぶり。さすがにウェトナール夫人の目つきも鋭い。エディもネット前へ猛然とラッシュするなど、〝さすが〟と思わせるプレーが随所に見られた。





実戦教室 〈第6回〉

ークを固めよう

小島一平

バドミントンは、相手のいるスポーツですから、一人で頑張るといっても限度があります。要するに相手になってもらう人が必要であり、また、チーム全体が一つの目標をもって、前進しなければなりません。

そこで、今回はチームワークについてお話ししましょう。

一人だけの力では限界が

まず第一に、勝負は〝勝てば官軍、負ければ賊軍〟といわれるとおり、勝つことによってチームワークも順調になるチームが多く、負けるとついグチがでたり、不平不満がつのったり、いろいろな問題がでてくることになりがちです。

どのようにしてムードの悪いときにチームをうまくまとめるかは、コーチやキャプテンの手腕でもあるのですが、これにはどうしても限界があるので、それぞれが自覚し、自分のことだけでなく、チームのこと、仲間のことを考えなくてはなりません。

きびしさあってのチームワークづくりを

そこで、ひとたびコートへはいったら、たとえ自分の調子が多少悪いようなことがあっても、全力を尽くして相対することです。

これが、協調性を養うことになり、まとまってゆくためには欠かせないことなのです。

スポーツはあくまでも楽しいものですが、選手としてプレーをする立場におかれた場合、試合に勝つことが要求され、もちろん、自分自身でも勝ちたい強くなりたいという気持ちをもって試合をするのは当然のことと思います。要するに、闘争本能というか、相手に勝つということは、スポーツをするうえで、もっとも大切なことであるともいえるでしょう。

各チームにおいては、あくまでも、きびしさあってのチームワークづくりをこころがけてください。

要するに、厳しい練習・合宿などを経験して、それが終了したときの、何ともいえない満足感、達成感をとおしてチームとしてのまとまりをつくってほしいと思います。

キャプテンは率先して打ち込め

私が、大学時代キャプテンになって、最初に実行したことは、まず、強硬に連帯責任をとるようにしたことです。

各学年の横のきずなを強くすることにもなると思ったからで、結果として、自分勝手な行動はまったくできないことになり、



合宿所でのスナップ（昭和40年）
右から四人目が当時中央大学三年生の筆者

●連載

体当たり

真実のチームワ

●*Ippei Kojima*

練習においても、たとえば二年生の一人がダラダラやっていれば、二年生全員をきびしく叱りました。

そして、一人一人が責任感をもつようになり、自分のため、そしてみんなのために頑張ろうという気持になりました。

しかし、当然ですが大切なことは、キャプテンはあくまでもバドミントンに関して勉強しなければならないし、練習にも率先して打ち込まなければ部員はついてこないということです。

全員が向上心をもて

また、部員全体にやる気を起こさせるには、チームの中において、競争心をあおることであり、全員に平等にレギュラーへのチャンスを与えることが必要です。

どうせ自分は正選手にはなれっこないんだ、という気持をだれか一人がもってしまったら、全体の士気も下がってしまうものです。

努力さえすれば、人より努力すれば、自分にも正選手への道が開かれているのだという気持をもって練習にのぞめば、チーム全体のムードももり上がってくるものです。

きびしい中にも暖かみを

チームにおいて、一人が奮闘しても、他の者がやる気なければ、そのチームのレベルはアップしないし、チームワークも期待できません。

ですから、個人個人が、いま自分が何をやらなければならないかを考えることです。

最後に、キャプテンの努力によって、チームの浮沈がかかっていることを強調しておきます。また、チームワークとは、きびしい中にも暖かみのあるものにしてほしいし、優勝の感激を味わうことは、苦しい練習に打ち勝ってこそ可能であるということも強調しておきます。



昭和41年に筆者の率いる中央大学チームは、全日本学生選手権において完全優勝をとげた（前列左から二人目が筆者）

●連載

私の歩んできた道

ツェドベリに敗れ、イヤな予感が……

前回は一九六七年の全英選手権大会シングルス決勝でアメリカのジュディ・ハッシュマンと対戦、あと一本というところまでリードしていながら負けてしまったことを書きましたが、翌年も準決勝で敗退してしまいました。

この一九六八年は、全英選手権の前に開かれたデンマークオープンの決勝で、エバ・ツェドベリ（スウェーデン）に、内容的には勝っていながら、ファイナルの末おかしな負け方をしてしまい、何かイヤな感じというか、ツェドベリに対する不安感をもってしまったのです。

そのためか、全英選手権の準決勝でインドネシアのミナルニと対戦したときにも、調子がさえず、たしかストレート負けではなかったかと思うのですが、時間はかなりかかったものの敗れてしまいました。

翌日の決勝でミナルニはツェドベリに敗れると〝きのう、あなたと長い試合をしたので疲れてしまったのよ〟などといわれたりしましたが、こんなわけで一九六八年はあまりパッとせずに終わってしまいました。

前の年にハッシュマンにあと一歩というところで痛い目にあっていたため、今年こそはという気持ちで行ったのに、デンマークでツェドベリにクギをさされてしまいそのまま全英でも優勝はできなかったわけです。

ツェドベリは、まだあまり注目されるような選手ではなく、ただデンマークの役員に〝今年、こちらで強い選手はだれですか〟と聞いたときに、ツェドベリがいると言われていました。

そして、実際にやってみるとぎこちないフォームのために、あまり強いという感じはせず、第一ゲームを取り、第二ゲームもだいぶリードしていたのです。ところが、ツェドベリ独特のドロップショットとクリアーに次第に苦しめられ、最後はほんろうされたという状態でした。

三年連続の苦杯を味わう

一九六九年は〝今年こそ〟という気持ちで出発したのですが、まずデンマークで湯木博恵さんに決勝で負けてしまいました。

このときの湯木さんは、初めての全英選手権参加で、いってみればこわいもの知らずで、思い切りやっていました。

全英選手権では、お互いに好調で決勝までは、わりあいに順調なペースで進んできました。そして決勝。

私は湯木さんとゲームを進めながら〝ここへ来て、日本人同士で決勝をするとは……〟と複雑な気持ちでした。試合の内容は、たしか簡単に決着がついてしまいましたが、これは私が調子悪かったとかいうのではなく、ストロークの一本一本が湯木さんのほうがすぐれていたといえます。そのために私は敗れ、ここで三年連続、全英選手権で苦杯を味わったのです。

このときは、しみじみと〝私にとって全英選手権というのはついていないんだな〟と思いました。そして大会終了後のパーティでメインテーブルに湯木さんがルディ・ハルトノと並んですわっているのを見て〝ああ、一度でいいからあそこに座ってみたいな〟と考えたりしましたが、もうだめだなどという気持ちはなく、また来年頑張ろうという気持ちでした。

そして、この年は全英選手権が終えると二ヶ月後にユーバー杯を控えていたために、今度はユ杯だということで、さらに気をひきしめていたわけです。

インドネシアの挑戦を受ける

この年のユーバー杯防衛戦に関しては、私自身は地元日本でやるということがかえって重荷になっていました。

そしてインドネシアはかなり強化しているというニュースもあり、勝てるという自信はありませんでした。

インターゾーンでインドネシアとイギリスが対戦したわけですが、イギリスは第一日にタイに7－0というスコアで勝てば、インドネシアもアメリカに7－0と快勝し、インターゾーン決勝となったわけです。

イギリスには、全英選手権のダブルスで優勝したボクソール・ウエトナールのペア、若手のホープ、ギリアン・ペリン（現ギルクス夫人）らがいて、実力的には五分とみられていましたが、インドネシアの安定したプレーの前に3－4で敗れ、チャレンジラウンド出場はインドネシアに決定しました。

六月十四日午後四時、対インドネシアの決勝が始まり、まず湯木さんがミナルニと対戦しました。私はこのとき、二番目の出場だったため、ウォームアップのため控室にいて、湯木さんの試合は見ていませんでしたが、まさか負けるなどとは考えていませんでした。

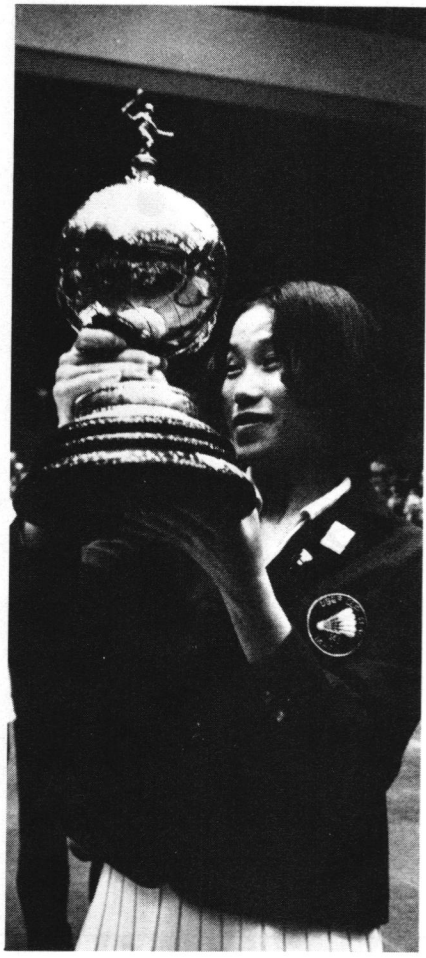
すると、第一ゲームを簡単にとられた、といった人がいたため、様子を見に出ていったのですが、湯木さんはミナルニのペースにはまってしまい、第二ゲームも簡単にとられてしまいました。

やはり、ユーバー杯の雰囲気

〈第四回〉

感激のユ杯初防衛に成功

●中山紀子



というものは、ちょっとふつうとは違っていたのです。私も体育館の入場を待つ、長い列を見たときに驚きましたし、バドミントン競技だけでは初めてという一万人もの観衆がつめかけた館内は、一種恐ろしいほどの感じもしたのです。この雰囲気の中で自分の力を存分に出し切るというのは並たいていのことではありません。湯木さんもやはり緊張してしまったのだと思います。

苦難の勝利へ

第二シングルスで私はインドネシアの若手、ポピー・トゥメンコルと対戦しました。私はその時、ポピーという選手を全然知らなかったので、一種の不安はありましたが、特別強い選手ではないと思っていました。試合前にポピーと顔を合わせたときもかなりかたくなっていたようでした。

試合が始まっても、私はとにかく勝たねばいけないということで一生懸命にやりました。すると、予想していたとおりの実力で2ゲームとも11－0のスコアで勝つことができました。

湯木さんが負けていたので、雰囲気を盛り上げるため最初からパーフェクトをねらっていたのではないかなどとよくいわれたのですが、そんな気持ちはありませんでした。

とにかく勝とうと思って試合をしただけで、結果としてラブゲームになったのです。

私が勝って1－1のタイに持ち込んだあと、高橋とも子さん（現味椹夫人）が、若手のウタミ・デウィ・クルニアワン（ルディ・ハルトノの妹）と対戦し11－3、11－8のスコアで降し、2－1としてダブルスになります。

ダブルスでも、湯木さんはシングルスでの敗戦のショックが尾をひいていたようで、調子がよくありませんでした。相手のミナルニ・レトノ組は、前年の全英選手権で優勝しているペアですのでかなり強く、第一ゲームは8－15でとられてしまいました。

しかし、私たちはふだんの力さえ出せばなんとかなると考えて、つとめて平静にふだんと同じようにと試合を進めていくうち、湯木さんも次第に調子があがってきて、いい感じになってきました。そして15－5でタイにもちこみ、ファイナルゲームも15－12で勝つことができました。しかし、ミナルニ・レトノのペアはコーナーいっぱいにスマッシュを入れてきたし、一球一球が非常にいいコースにきたためかなりの苦戦でした。

この時点でスコアは3－1。あと一つ勝てば防衛に成功ということで、この時点ほどハラハラしたことはありませんでした。自分がコートにはいっていればそんなことはないのですが、ベンチでみていると〝あと一本、あと一本〟と思って、いたたまれない気持ちでした。

天野博江さんと高橋さんのペアは落ち着いた試合運びで、ヘスティ・ヌルハエナ組に完勝、ついにタイトルを守ることができました。

感激の初防衛

勝てて本当によかったなあ…というのがその時の一番の印象でした。

それまでは、ニュージーランドでタイトルをとっても、フロックではないかという声が強かったため、なんとしてもこの時はタイトルを守りたかったのです。スコアは6－1ということで大差のような印象を与えるのですが、内容はとても楽ではなく、一歩間違えばというきわどいものでした。それだけにこの時の感激はひとしおでした。

そして、バドミントンが行列のできるほど注目されるなどとは考えていなかったため、最終日の様子には驚いてしまいました。その大観衆の中でユーバー杯を守ることができ、こんな嬉しいことはありませんでした。

（つづく）

連載●第二回
ビギナーへの手紙
——ゲームを見ながら撮りながら(上)

■羽戸民敦

もう八年も前になることだろうか。日本のバドミントンチームが初めて中国選手を見たのは。その時、彼等、彼女等はコートサイドで一生懸命ノートにペンを走らせていたとのことだ。そしてそのままの姿を、昨年の日中大阪大会、陳玉娘、湯木博恵両選手の試合のテレビ中継のブラウン管で見せてくれたのは、生々しい記憶となっている。

「学習する」とはどういう事だろう。「学」は「まなぶ」、「まなぶ」は「まねる」からきていると言われている。「素晴らしい選手になる」その大事なステップとして、「素晴らしい選手を良く見る」ということがあるだろう。どんなに優秀な選手でも、初めてラケットを握った時は、皆君と同じだったのだ。ある人は、君より年経って握ったかもしれない。また、ある人は、君より恵まれない体力だったかも知れない。しかし、長年のたゆまぬ努力で、今の実力をつけたのだ。そういう意味で、今回と次回は、どう見、どう学ぶか、という点にスポットを当てて述べてみよう。

あなたのクラブに強い先輩がいれば、あなたは恵まれている。あなたが中心になってみなを引っ張っていかなければいけない立場ならより強い学校、チームを選んで練習を一緒にお願いするのも良い。テレビ等の学習の場も、注意すれば年に何回かはつかむ事ができる。求めよ、さらば開かれん。自分からそういう機会を数多く作るよう努力しようじゃないか。

見て楽しむということでは、シャトルの動きや、得点を追うのも良い。また、国際大会等では、ベンチの様子を見るのも愉快だ。その一例。一九七二年の第九回トマス杯、日本対マレーシアの対戦等はそういう点でも、大変楽しかった。第一日目から、在留マレーシア人たちの声援は場内を圧していた。ゲームの途中に審判長から注意の場内放送があった程だ。その興ふんは、第二日目、第二シングルスのP・グラナン——本間順次の第三ゲームでその極に達したようだった。セッティングの末の16オール。何回もくり返すサービス・オーバーの度ごとにどよめくマレーシアベンチ。立ちあがりかけて座る選手、足を踏みならす選手。そして、グラナン選手の勝利の一瞬に抱きあい、飛びあがり、ラケットを宙高くほうり投げるその喜びの表現、ほんとうに楽しいものだった。

閑話休題。

いかにプレイを見たらよいか。学んだら良いか、初心に返って、いくつかの観点にまず大きく分けて話を進めてみよう。

(1) 基本のストロークやフットワークを学習したい時
(2) シングルス・ゲーム自体を
(3) ダブルス自体を
(4) 良い写真をとるには

(1)について。

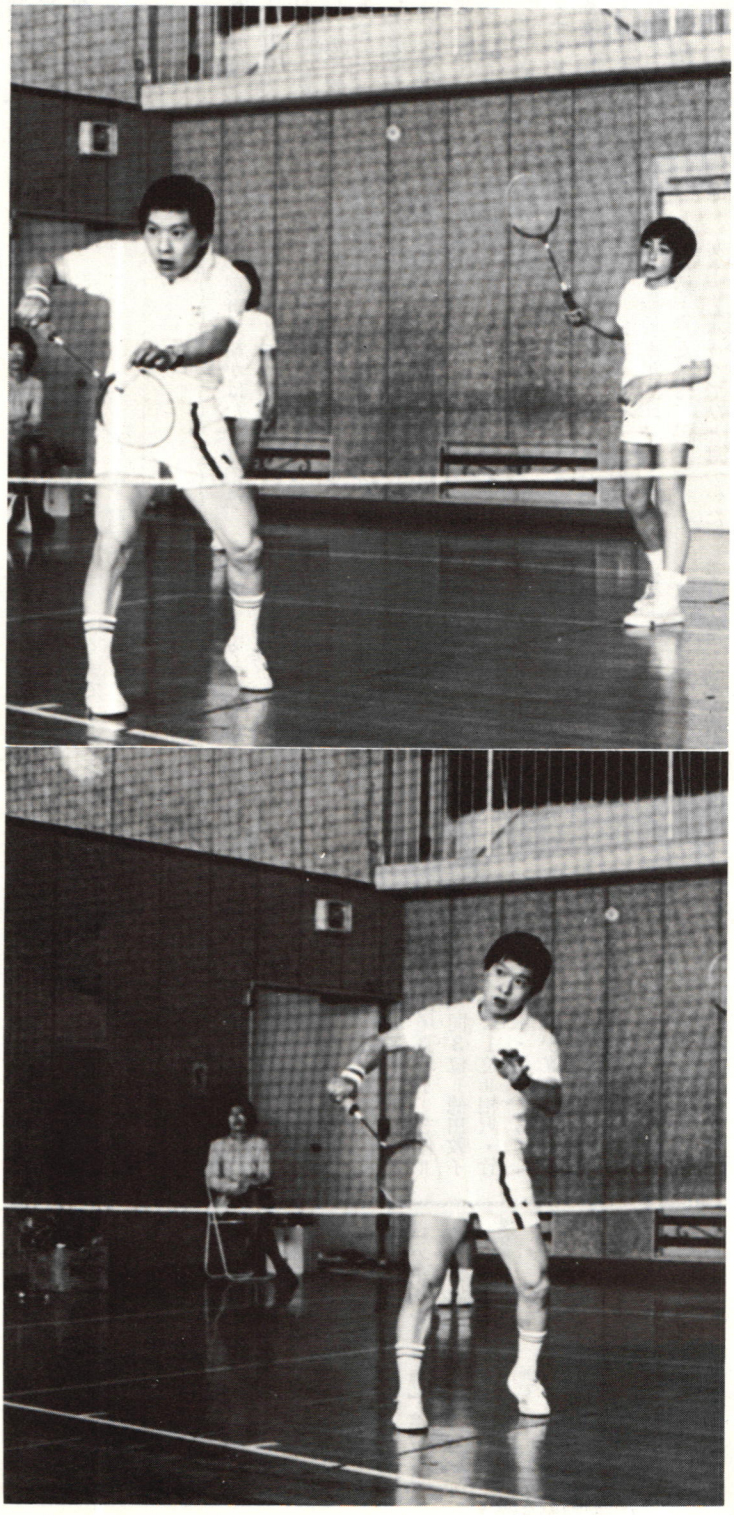
一流選手の打ちあいを見た時にまず感じるのは、あの羽根を打つ音の強さだ。そして、シャトルがどうしてあんなに良く飛ぶのだろう、どうしてあんなに速く走れるのだろう、と、その秘密を探りたくなる。同じラケットで打ちながらも、しかし、ちょっとした力の入れ方、タイミングの違いで様々なフライト(飛び方)をするシャトル、そこに魅力を感じてバドミントンに突進した人もいるだろう。いろいろな案内書をひもといてみると、あそこはこうして、こういう風に、と書いてあるけれども、それを自分で発見し、なるほどそうだ、と納得することが、あなたの力を数段伸ばしてくれることになる。そこで、プレイを見る時の着眼点を下の方から順に書いてみよう。もちろん、全体の中の部分ということをくれぐれも念頭に置いておくように。さらにまた、本誌51号以下、小島一平氏がくり返し述べていられる基礎的な体力づくりが、その根底にあることを忘れないように。

㋑足の甲、つま先、かかと。これは靴がどっちを向いているか、かかとがついているのはどんな時か、ということだ。走りまわっている時は見にくいけれど、打つ時はどっちを向いているか。また、左右の甲がネットに平行か垂直か。練習しはじめの女子は、とかく内またになってしまう。これは腹筋や背筋の運動の時も注意しなければいけないことだ。

㋺ひざ。伸びているのはどういう時か、まがっている時は？ストロークや打つ位置の違いでどうか。また、左右の違いは？

㋩腰。位置・高さに気をつける。両足の開きとの関係。後へさがる時、腰をどう使っているか、入れているか。㋺との関係は？、打つ瞬間よりも、ホームポジションから他へ移る時が目

目から足のつま先まであらゆる点が，多くのことを教えてくれる
小島一平選手のショートサービス（74.5.5. 筆者撮影）



のつけ所だ。

㈡足の運び方　これはもちろんフットワークの研究の時。すり足か。どうか。

㈢上半身の向きもあげなければいけない。クリアーのコントロールが悪い人は、打球の瞬間の上半身の向きを、ラケットの面の向きと合せて研究してほしい。特に左利きの場合、利き腕と胴のバランス、関係を考える必要のある人もいるようだ。

㈣利き腕、手。（ラケットを持っている方）打つ前の構えから打ち終るまで。肘のあげ方、伸ばし方。位置、手首の返し。どこで力が入りどこで抜いているか。大変細かい点では、ラケットのどこを握っているか。握力の非常に強い選手は、ハンドルのエンドを掌に包み込み、ラケットを長く持っている場合がある。そんな選手を発見するのも楽しい。

㈤ラケットの面

㈥打点（シャトルが面のどこに当るか）「より前で、より高く、より速く」というモットーがあるように、大事な所だ。初心者は特に、ラケットの面の使い方が難しい。同じ力でクリアーを打ったにしてもまがっていては半減してしまう。

㈦左手（利き腕の反対）の使い方。身体のバランス、打つタイミングをつかむのにどう使っているか。

㈧目。打球を常に追う目。練習時と試合中の違いに、その選手の気力があふれている。

以上十ヵ所、細かい事を並べあげたが、どれが大切で、どれが軽いというものではない。それぞれのストロークを学習する時、これらを関連づけ、総合することも大事だ。また、逆に、一度に全部見ようと思っても無理だ。下半身とか上半身とかに分けて、一つ一つ自分のものにすることが早道と言えるのではないだろうか。これら一つ一つの観察は、ゲームの最中よりも、試合前のウォーミングアップの時の方が良く見られる場合もある。

(1)の項で紙数もつきたようだ。(2)以下については次回をお楽しみに。（次回はゲームを見ながら撮りながら（下）を）

■本誌一部地区遅延のおわび

本誌は4月末日に54号（4月号）まで刷了し、55号（5月号）も5月末日に刷了しておりましたので、特約スポーツ店でお求の方には翌月早々にお渡ししましたが、直接発送の読者の方々には、発送事務の手違いにより、一部の地区では到着が54号で6月8日頃、55号は6月20日頃という遅れが起きてしまいました。

そのため、多くの読者の方方から「友人の所には来ているのに私の所には未着だ」というお叱りをいただきました。

今後は発送事務の合理化を進めますので、何とぞ今回の遅れにつきましてはお許しくださるようお願いいたします。

バドミントン界編集部

■本誌専用合本ファイル予約受け付けのお知らせ

＝定価一部　四〇〇円

本誌は、読みすての雑誌ではありません。ずっと保存しておくことによってバドミントンの百科辞典にもなり、大切な資料ともなるものです。

しかし、長い間適当なファイルがなく、ご不便をおかけしていましたが、このたび専用ファイルをお取り次ぎいたします。このファイルは、本誌に穴をあけることなく、紐も不要で、簡単に一年分十二冊を綴じることができます。

ご希望の方は、必要冊数を明記して、バドミントン界編集部あて、必ず往復ハガキでお申し込みください。発送十日前にご案内いたしますので代金をお送りください。ご案内がいくまで、ご送金の必要はありません。

編集室から

○…今月号はお待ちかねの「全英選手権大会写真大特集号」です。山田真市さんがコートサイドで撮影した数千枚の中からとくに選びましたが、まだまだ掲載したいものがたくさんありますので、いずれご紹介したいと思います。

○…デンマークオープン選手権や、大会中のスナップ、連続写真も多数すばらしいものがありますので、来月号以降をご期待ください。

○…男子ダブルスで念願のベスト4入りを池田・栂野尾組がはたしたのは、今年のヨーロッパ遠征では明るいニュースでしたが、一方シングルスでは二回戦進出がせいいっぱいという結果で、世界に大きく水をあけられた感はいなめません。今後の選手の発奮と、各県・日本協会の一体となった計画的な選手強化、バックアップを期待したいものです。読者の皆様もご意見等ありましたらふるって投稿ください。誌上でいっしょに考えたいと思います。

○…また、来年にユーバー杯防衛を控えた女子は、湯木選手の女王カムバックでひと息ついたものの、ダブルスでは期待の相沢・竹中組がコンディション不調のまま、準々決勝で敗れ一喜一憂といったところ。

イギリスの総合力、インドネシアの未知数の力プラス地元の利など、ユ杯防衛には並々ならぬ苦難の道が待ちかまえているようです。

○…6月8日、9日の両日、川崎市のいすず自動車体育館で行なわれた第7回アジア競技大会日本代表選手選考大会の結果は次のとおりでした。

男子シングルス1位＝小島一平、2位＝栂野尾昌一、3位＝本間順次、同3位＝秋山真男

男子ダブルス1位＝飯野・土田、2位＝池田・栂野尾、3位＝本間・今泉、同3位＝小島・秋山

女子シングルス1位＝湯木博恵、2位＝西尾真理子、3位＝相沢マチ子、同3位＝徳田敦子

女子ダブルス1位＝相沢・竹中、2位＝湯木・池田、3位＝石崎・柴山、同3位＝西尾・秋本　以上でしたが、詳細は次号でお伝えします。

○…次号は、いよいよ近づくインターハイのニュース、中国遠征関係ニュース、そしてデンマーク選手権を中心とするヨーロッパ遠征関係の写真を予定しています。なお5月号でお願いしましたアンケートの〆切りは7月20日ですのでよろしく。（S）

【バドミントン界】第57号
昭和49年6月25日　印刷
昭和49年7月1日　発行
編集兼発行人　秦　浩
発行所　東京都渋谷区神南一の一の一
岸記念体育館内
日本バドミントン協会
電話　四六七・三一一一（内線二二五一
四六七・七〇九五（直通）
郵便番号・一五〇
振替口座・東京三二一九三
印刷所　東京都豊島区南大塚二一二九
明宝印刷株式会社
定価　一部二百二十円

©無断転載を禁ず



国籍は世界。ヨネックス。

ヨネヤマが
社名変更しました。

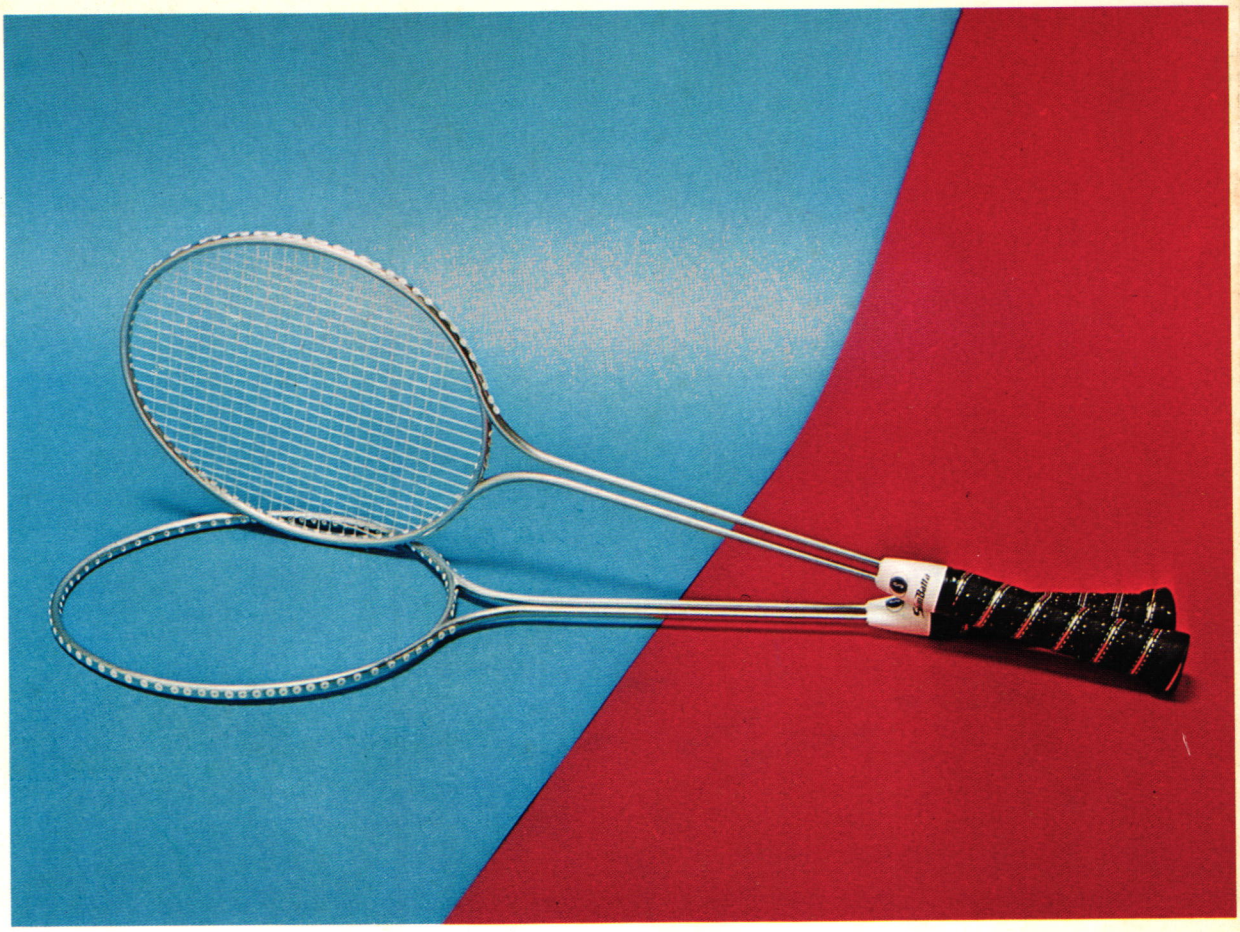
世界の一流プレイヤーに使われ、世界のコートで熱い視線を浴びてきたヨネヤマが、名前を変えました。いま、こころも新たにヨネックス。世界のレベルを決めるブランドに、ふさわしい名前です。グローバルな響きです。バドミントンを科学の目でとらえるヨネヤマの、力強い変身。ヨネックス。この5文字が、ことばの違いを越え、国籍を越えて、ひとびとの心をひとつに結びます。すでにもう、世界のひとたちはかってのヨネヤマをヨネックスと、そう呼びはじめました。さあ、あなたも。

No.9000

ハイステンレス
￥4,800(フレーム・ケース付)
￥5,400(ヨネックスシープ張上・ケース付)

YONEX

月刊「バドミントン界」第57号
昭和四十九年七月一日発行（毎月一回一日発行）
昭和四十四年十二月二十三日 第三種郵便物認可
発行所
東京都渋谷区神南一ノ一ノ一
岸記念体育会館内
日本バドミントン協会 定価二百二十円



ALL STEEL RACKET SunBatta TWIN SHAFT

究明され！
完成された！
S-74
ALL ROUND

プレーヤーが長い間求めていたオールスチールが誕生しました。
従来のオールスチールラケットの利点及び欠点をあらゆる角度から究明され改良をし今ここに完成され皆様の目の前に現われました。
ツインシャフトの採用によって、フレームとシャフトとのひねりが最小限に押えられ自由自在なショットを楽しむ事が出来るでしょう。
アタックによし、レシーブによし、それがS-74オールラウンドです。
◇フレームのみ（ケース付）￥ 5,000

SunBatta TOKYO
サンバタ